

県営ほ場整備事業(土田地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

志賀町

## 館開遺跡群

2006

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

たち ひらき  
館 開 遺 跡 群

2006

石 川 県 教 育 委 員 会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は館開テラアト遺跡、館開城跡、仏木新林遺跡、得田氏館跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は羽咋郡志賀町館開、徳田地内である。
- 3 調査原因は県営ほ場整備事業（土田地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は（財）石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて平成15（2003）年度から平成17（2005）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査・出土品整理・報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。
- 6 現地調査は平成15（2003）年度及び平成16（2004）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。
  - (1) 平成15（2003）年度  
期 間 平成15（2003）年5月9日～同年7月18日、同年11月4日～同年12月19日  
面 積 1,490㎡（館開テラアト遺跡915㎡、館開城跡50㎡、仏木新林遺跡80㎡、得田氏館跡445㎡）  
担当課 調査部調査第2課  
担当者 本田秀生（調査専門員）、谷内明央（主事）
  - (2) 平成16（2004）年度  
期 間 平成16（2004）年4月27日～同年6月10日  
面 積 610㎡  
担当課 調査部調査第2課  
担当者 本田秀生（調査専門員）、谷内明央（主事）
- 7 出土品整理は平成16（2004）年及び平成17（2005）年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書刊行は平成17（2005）年度に実施し、調査部調査第2課が担当した。編集と執筆は谷内明央（調査部調査第2課主事）が行った。
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。  
石川県農林水産部農業基盤整備課、大藤雅男、志賀町教育委員会、中能登農林総合事務所、平野由郎（五十音順、敬称略）
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は磁北である。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海拔高）による。
  - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。
  - (4) 赤彩・被熱痕・目痕はスクリーントーンを使用した。

## 目 次

第1章	調査の経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	出土品整理・報告書刊行	2
第2章	遺跡の位置と環境	4
第1節	遺跡の位置と地理的環境	4
第2節	歴史的環境	4
第3章	館開テラアト遺跡	7
第1節	調査の概要	7
第2節	遺構	7
第3節	遺物	12
第4節	小結	14
第4章	館開城跡	25
第1節	調査の概要	25
第2節	遺構	25
第3節	遺物	27
第4節	小結	30
第5章	仏木新林遺跡	37
第1節	調査の概要	37
第2節	遺構と遺物	37
第3節	小結	39
第6章	得田氏館跡	40
第1節	調査の概要	40
第2節	平成15年度調査区	40
第3節	平成16年度調査区	44
第4節	小結	47
第7章	まとめ	68

## 挿図目次

第1図	調査区位置図	3	第23図	出土遺物実測図	39
第2図	遺跡の位置	4	第24図	調査区位置図	41
第3図	周辺の遺跡	5	第25図	調査区土層図・全体図	48
第4図	平成14・15年度調査区位置図	8	第26図	竪穴住居実測図	49
第5図	平成14年度調査区全体図	9	第27図	土坑実測図	50
第6図	A区遺構実測図	15	第28図	ピット・溝実測図	51
第7図	B区遺構実測図①	16	第29図	S D 2 出土遺物実測図	52
第8図	B区遺構実測図②	17	第30図	出土遺物実測図	53
第9図	B区遺構実測図③	18	第31図	A・B区遺構実測図	54
第10図	B区遺構実測図④	19	第32図	C区遺構実測図	55
第11図	C区遺構実測図①	20	第33図	D区遺構実測図①	56
第12図	C区遺構実測図②	21	第34図	D区遺構実測図②	57
第13図	B区出土遺物実測図	22	第35図	D区遺構実測図③	58
第14図	B・C区出土遺物実測図	23	第36図	E区遺構実測図①	59
第15図	調査区位置図	26	第37図	E区遺構実測図②	60
第16図	A・B区遺構実測図	31	第38図	E区遺構実測図③	61
第17図	S D 2 中・下層等出土遺物実測図	32	第39図	F区遺構実測図①	62
第18図	S D 2 上層出土遺物実測図①	33	第40図	F区遺構実測図②	63
第19図	S D 2 上層出土遺物実測図②	34	第41図	E・F区遺構実測図	64
第20図	S D 2 上層出土遺物実測図③	35	第42図	出土遺物実測図①	65
第21図	調査区位置図	38	第43図	出土遺物実測図②	66
第22図	遺構実測図	38			

## 表目次

第1表	遺跡地名表	6	第6表	得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表②	58
第2表	館間テラアト遺跡遺物観察表①	24	第7表	得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表③	66
第3表	館間テラアト遺跡遺物観察表②	24	第8表	得田氏館跡平成16年度調査区 遺物観察表①	67
第4表	館間城跡遺物観察表①	30	第9表	得田氏館跡平成16年度調査区 遺物観察表②	67
第4表	館間城跡遺物観察表②	36			
第5表	仏木新林遺跡遺物観察表	39			
第6表	得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表①	55			

## 図版目次

図版1	館間テラアト遺跡①	図版9	館間城跡①	図版17	得田氏館跡②(平成15年度)
図版2	館間テラアト遺跡②	図版10	館間城跡②	図版18	得田氏館跡③(平成15年度)
図版3	館間テラアト遺跡③	図版11	館間城跡③	図版19	得田氏館跡④(平成15年度)
図版4	館間テラアト遺跡④	図版12	館間城跡④	図版20	得田氏館跡⑤(平成16年度)
図版5	館間テラアト遺跡⑤	図版13	館間城跡⑤	図版21	得田氏館跡⑥(平成16年度)
図版6	館間テラアト遺跡⑥	図版14	館間城跡、仏木新林遺跡	図版22	得田氏館跡⑦(平成16年度)
図版7	館間テラアト遺跡⑦	図版15	仏木新林遺跡	図版23	得田氏館跡⑧(平成15年度)
図版8	館間テラアト遺跡⑧	図版16	得田氏館跡①(平成15年度)	図版24	得田氏館跡⑨(平成15・16年度)

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

県農林水産部農業基盤整備課（以下、農林）は農地の生産性を向上させるために農地・用排水路・農道などの整備を一体的に行う、ほ場整備事業を実施している。一方、県教育委員会文化財課（以下、文化財課）は開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、事前に事業内容の照会を行っている。

農林は志賀町館開・徳田地区内に、ほ場整備事業を計画し、埋蔵文化財分布調査を文化財課に依頼した。試掘の結果、調査区域の一部で埋蔵文化財が確認された。館開テラアト遺跡（約27,300㎡）、仏木新林遺跡（約11,800㎡）、館開城跡（約4,000㎡）、得田氏館跡（約20,000㎡）であり、古代・中世の集落跡の存在が予想された。文化財課は分布調査の結果を農林に回答し、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直しを要請した。双方協議の結果、田面部分については盛土で埋蔵文化財を保護し、排水路敷設や切土のように工事の影響が遺跡に及ぶ箇所については発掘調査対象とすることで合意がなされた。

農林は文化財課に発掘調査を依頼し、文化財課は（財）石川県埋蔵文化財センター（以下、埋文）に発掘調査を委託した。調査は調査部調査第2課が担当した。

### 第2節 調査の経過

平成15年4月28日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われた。その結果、得田氏館跡→館開テラアト遺跡の排水路箇所→仏木新林遺跡の順に調査し、館開テラアト遺跡のバイブライン箇所と館開城跡については秋以降の施工となるため、その時期に合わせて調査することとなった。

5月9日に得田氏館跡（場所は第1図参照）の表土除去を行った。12日から作業員が参加して器材を搬入し、包含層掘削を行った。16日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行っていった。遺構・遺物は4～5区に顕著であった。遺構は弥生～古墳時代と古代のものがあり、遺物は主に弥生・古墳時代のものが出土している。6月19日には実測まで完了した。

6月20日から館開テラアトA区の調査に着手した。館開テラアトA区では遺構・遺物が希薄であり、遺跡の東端を示すものと判断した。一方、館開テラアトA区西側周辺では工事が同時並行で行われており、遺跡外とされていた箇所の一部で遺構・遺物を発見した。その箇所の取り扱いと現在の発掘調査状況を文化財課に報告したところ23日に現地で協議することとなり、その結果、排水路箇所の一部（A区南北トレンチ南端から70m分）を調査対象から外し、設計変更による要調査箇所（A区東西トレンチの幅が2倍となり200m）と遺構・遺物が確認された箇所（B区の260m）を新たに調査対象とすることで合意がなされた。7月2日から仏木新林遺跡の調査に着手した。8日から遺構検出・掘削を行い、順次写真撮影・実測を行っていった。14日で実測を完了し、18日に次の現場である珠洲市北方池の下遺跡へと器材を搬出し、10月まで調査を中断した。

10月29日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われ、館開城跡・館開テラアトB区の揚水機場箇所→館開テラアトC区→館開テラアトB区バイブライン箇所の順に調査することとなった。11月4日に館開城跡の表土除去を行った。11月7日から作業員が参加して器材を搬入し、遺構検出を行い、順次遺構掘削・写真撮影・実測を行っていった。17日からは調査班を二手に分け、本田班が館開

城跡、谷内班が館開テラアトB区揚水機場箇所及びテラアトC区を担当した。館開城跡では縄文時代の落とし穴や古墳時代の土器が多量に出土した溝などを検出したが、中世に関連するような遺構は検出できなかった。館開城跡の調査は12月5日に完了し、その日に本田班が谷内班と合流した。

館開テラアト遺跡ではB区揚水機場箇所・C区が12月1日に実測まで完了した。C区で柱穴を何基か検出したが調査区狭小で広がりはつかめなかった。B区パイプライン箇所は9日から遺構検出を始め、15日に遺構掘削まで完了した。B区では中世の掘立柱建物や土坑を検出した。調査の結果、館開テラアトA～C区は中世を主体とした集落跡であることが明らかとなった。19日に実測・撤収を行い農林・文化財課立会いの下、現地の引渡しも行った。こうして平成15年度の現地調査は完了した。

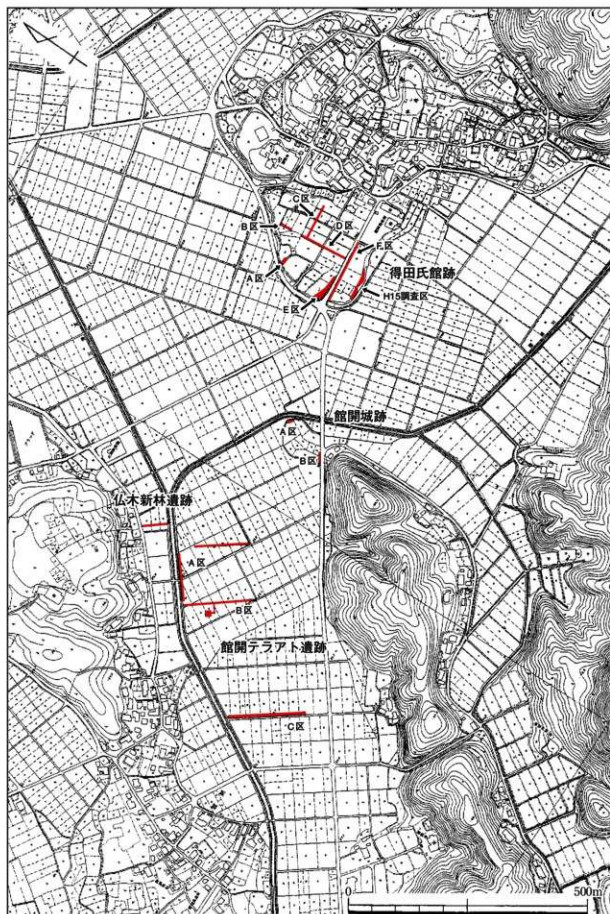
平成16年度は得田氏館跡の残りの部分を調査することとなった。平成16年4月21日に農林・文化財課・埋文との間で現地協議が行われた。調査区が6箇所（A～F区で第1図参照）に分かれる。A・B・E区が切土で、C・D・F区にパイプラインを埋設する設計であった。協議の結果、A～C区→E区→D区→F区の順に調査することとなった。4月27日にA～C区の表土除去を行い、5月10日から作業員が参加し、器材を搬入して遺構検出・掘削を開始し、順次写真撮影・実測を行っていった。B区では竪穴住居を検出し、弥生～古墳時代の土器が出土した。

B区の北東周辺、すなわち丘陵上の北端縁で道路・田面の法面工事が予定されていたが、遺跡に影響が及ぶ可能性があった。5月17日に農林・文化財課・埋文の間で遺跡への影響範囲を現地で確認し、28日に農林・文化財課・埋文立会いの下で試掘を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。18日にE区の表土除去を行い、順次遺構検出・掘削、写真撮影、実測を行っていった。D区とF区で竪穴住居を検出し、弥生～古墳時代の土器が出土した。またD区で丘陵を東西に横断する鞍部を検出した。6月8日に実測まで完了し、9日に現地引渡しを行い、平成16年度の現地調査は完了した。

### 第3節 出土品整理・報告書刊行

平成16年度、文化財課は平成15年度調査分の出土品整理を埋文に委託し、企画部整理課が担当した。整理内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースと遺構図トレースである。

平成17年度、文化財課は平成16年度調査分の出土品整理と平成15・16年度分の報告書刊行を埋文に委託した。出土品整理は企画部整理課が担当し、報告書刊行は調査部調査第2課が担当した。



第1図 調査区位置図 (S=1/12,000)



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

館開遺跡群は石川県羽咋郡志賀町館開、徳田地内に位置する。志賀町は能登半島中央部西側に位置し、南は羽咋市、東は七尾市・中能登町、北は輪島市・穴水町と接している。志賀町北部は旧富來町であり、平成17年9月1日に合併して新生志賀町となった。地形は南部から東部にかけて眉丈山系に連なる低丘陵地帯が広がり、北部では志賀浦台地に面している。それらに囲まれるような形で古くは旧福野湯低湿地帯が広がっていたが、現在は平野部を形成している。西部は海岸線に沿って砂丘が続き、その内側を国道249号線が走る。国道249号線は北部に入ると丘陵地の谷間を抜け、旧富來町へと続く。東部の低丘陵地帯にはその頂部を縦断しながら能登海浜有料道路が抜けている。



第2図 遺跡の位置

館開、徳田は志賀町中央部東端に位置する。周りを丘陵に囲まれた小盆地状地形で、旧福野湯低地部に注ぎ込む米町川の支流、仏木川がその中を流れている。低地部東端の丘陵の合間を大津川に沿って下ると七尾市田鶴浜町大津へ入り、七尾湾にたどり着く。このような地理的条件から古くから外浦と内浦を結ぶ交通の要衝として重要な役割を果たしていた。

### 第2節 歴史的環境

盆地周辺の遺跡を概観する。近年の発掘調査で様相が少しずつ明らかになりつつある。

縄文時代では館開城跡(2)で落とし穴を検出した。七尾市田鶴浜町では早期末～前期初頭の貝塚や後期～晩期の貯蔵穴群などが確認された三引遺跡が特に有名である。大津遺跡(23)では早期末、前期中・後葉～中期後半にかけての遺構が確認されている。大津くろだの森遺跡(25)では中期中葉の竪穴住居や後期中葉とされる環状柱列・掘立柱建物が確認され、中期初頭～晩期末の土器が出土している。

弥生時代では代田宮団遺跡(13・14)で前期の土器が出土している。得田氏館跡(4)では後期～古墳時代前期の集落を検出した。丘陵上に位置する仏木新林遺跡(3)は弥生～古墳時代の集落跡と想定している。七尾市田鶴浜町の大津神社境内遺跡(21)では小型有樋式石剣が採集されている。

古墳時代では得田氏館跡で竪穴住居を検出しており、館開城跡では溝状遺構から多量の土器が出土している。古墳は徳田古墳群(19)や代田古墳群(15)などが盆地奥に築造されている。徳田古墳群は25基からなり、1号墳は全長85mと能登地域最大級の前方後円墳として知られている。

古代では館開テラト遺跡(1)で古代の遺構・遺物が確認されている。また付近のは場整備工事中に古代の遺物が出土している。仏木新林遺跡や得田氏館跡でも古代の遺物が出土した。

中世では古くから館跡・城跡が知られている。徳田集落に得田氏館跡があり、館開集落向かいの丘陵上には館開城跡、そのさらに奥の丘陵上に得田城跡(33)がある。館開野開遺跡(27)では区画溝や製鉄関連遺構、掘立柱建物などが検出され、手工業の拠点との見解がなされており、得田氏館跡との関連が注目される。館開テラト遺跡でも中世の遺構・遺物を出した。



第3図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

館開の地名は中世の土田領主、得田氏に開拓された館に由来するといわれている。また徳田には同地区中央の小段丘上に得田氏館跡が存在するとされており、土塁もわずかに残存している。つまり得田氏の館は館開と徳田に1ヶ所ずつあったことになる。「志賀町史」では戦国時代中期の得田秀章の時代に館開から徳田の地に移転したという見解がなされている。また鎌倉～南北朝時代（得田氏総領家の時代）は館開に館があり、室町～戦国時代（得田氏庶流の時代）に徳田へ移転したという見解が平野由郎氏によってなされている。

館開と館開の違いであるが、県教委の遺跡地図（1992）で使用されているのは「館開」、実際に地元で集落名として使用されているのが「館開」である。そこで本書では、遺跡名を示すときに「館開」、地名を示すときには「館開」を使用することとする。

第1表 遺跡地名表

番号	名 称	所 在 地	種 別	立 地	時 代
1	館開テラアト遺跡	志賀町館開	集落跡	平地	古代・中世
2	館開城跡	志賀町館開	城跡	丘陵	縄文・古墳等
3	仏木新林遺跡	志賀町仏木	集落跡	丘陵	弥生～中世
4	得田氏館跡	志賀町徳田	館跡	平地	弥生～古代等
5	黒詰遺跡	七尾市田鶴浜町大津	散布地	丘陵	不詳
6	瀬廻ヶ嶽穴竃塚	志賀町印内	古墳	丘陵	古墳
7	谷屋修堂遺跡	志賀町谷屋	散布地	平地	縄文
8	谷屋長徳寺遺跡	志賀町谷屋	散布地	丘陵端	縄文
9	谷屋光孝寺遺跡	志賀町谷屋	散布地	丘陵端	縄文
10	谷屋開拓地遺跡	志賀町谷屋	散布地	平地	不詳
11	印内ラントウ横穴群	志賀町印内	横穴墓	丘陵斜面	古墳
12	土田印内遺跡	志賀町印内	散布地	台地端	不詳
13	代田営団A遺跡	志賀町代田	散布地	平地	縄文～古代
14	代田営団B遺跡	志賀町代田	集落跡	平地	縄文～古代
15	代田古墳群	志賀町代田	古墳	丘陵	古墳
16	代田遺跡	志賀町代田	集落跡	丘陵端	古代・近世
17	代田八兵衛地蔵墓	志賀町代田	墳墓	丘陵端	中世
18	矢田遺跡	志賀町矢田	散布地	平地	弥生
19	徳田古墳群	志賀町徳田	古墳	丘陵	古墳
20	徳田宮前遺跡	志賀町徳田	散布地	平地	古代
21	大津神社境内遺跡	七尾市田鶴浜町大津	散布地	丘陵麓	弥生・古墳
22	大津神社前遺跡	七尾市田鶴浜町大津	散布地	平地	不詳
23	大津遺跡	七尾市田鶴浜町大津	集落跡	丘陵	縄文～古墳
24	大津ロクベエ遺跡	七尾市田鶴浜町大津	散布地	丘陵	古墳～近世
25	大津くろだの森遺跡	七尾市田鶴浜町大津	集落跡	平地	縄文・古代～近世
26	徳田濁ヶ谷内遺跡	志賀町徳田	散布地	平地	縄文
27	館開野間遺跡	志賀町館開	集落跡	平地	中世
28	館開中間遺跡	志賀町館開	集落跡	平地	古代
29	火打谷オガチ遺跡	志賀町火打谷	散布地	台地	縄文
30	出雲2号横穴	志賀町火打谷	横穴墓	丘陵斜面	古墳
31	出雲1号横穴	志賀町火打谷	横穴墓	丘陵斜面	古墳
32	出雲堂坂遺跡	志賀町火打谷	墳墓	丘陵	中世
33	徳田城跡	志賀町徳田	城跡	丘陵頂	不詳
34	徳田コイテ遺跡	志賀町徳田	散布地	丘陵端	縄文

## 第3章 館開テラアト遺跡

### 第1節 調査の概要

調査区はA～C区に分かれる（場所は第4図）。A区は2箇所に分かれ、排水路敷設箇所中心上に2m幅の調査区を設定した。調査面積は430㎡である。B区はパイプライン埋設箇所中心上に1.5m幅で設定した調査区と揚水機場箇所に分かれ、調査面積はそれぞれ210㎡と50㎡の計260㎡である。C区はパイプライン埋設箇所中心上に1.5m幅の調査区を設定した。調査面積は225㎡である。したがって全調査区の合計面積は915㎡となる。遺構の分布はB・C区の一部に集中していたことからグリッドによる区画割りを行っている。遺構番号は調査区ごとに付している。

現況は水田であった。遺跡南側の丘陵、通称城山から遺跡へと標高は減じていき、仏木川を挟んで館開集落へといくにつれ標高が増していく。したがって遺跡は現居住域から外れた低地に立地していることになる。アップダウンのある遺跡内でも若干標高が高い地点では遺構の分布が微増する傾向が認められた。昭和30年代の耕地整理に伴う削平の結果、暗灰褐色粘土主体の遺物包含層は残りが悪く、土層の大半が農道盛土ないし耕土で占められる。地山は黄灰色ないし青灰色粘土であった。

参考までに（財）石川埋文センターによる平成14年度調査の遺構配置図を第5図に再録した。なお以下の説明で検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示している。

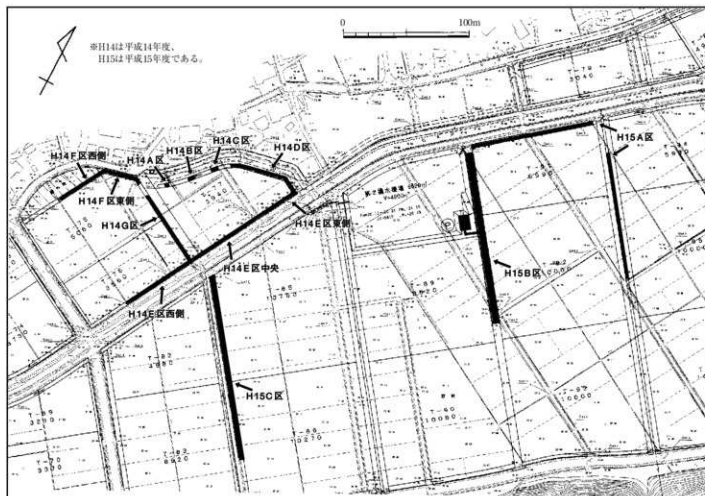
### 第2節 遺 構

#### 1. A 区

A区は仏木川沿いに走る東西トレンチと現況田面を縦断する南北トレンチに分かれる。基本層序（第6図）は耕土・盛土層（1～3、9、13・14、16層）、自然堆積層（4・5、17～19層）、無遺物層（6～8・20層）、腐植物層（10～12、15層）の大きく4層に分かれる。遺物包含層は確認できなかった。無為物層と判断した面まで掘削したが、セクションg-h間の土層ではさらに下へと腐植物層が続いていた。またe-f間の5層目で耕作痕跡と思われる箇所が認められた。東西トレンチで柱穴（P）1基、東西トレンチ東側及び南北トレンチで鞍部を検出した。検出状況と調査区壁土層観察の結果から、東西トレンチの西端はかろうじて居住域として認識できるが、それ以外の箇所は生産域として活用されたか、もしくは沼地形であったと考える。

#### P 1（第6図）

東西トレンチ西半で検出した。平面形態は楕円形を呈するが、10cm下がりで掘方が角張り、底面は長方形を呈する。検出高22.1m・長軸70cm以上・短軸70cm・深さ65cmを計測する。土層は暗灰褐色粘土が主体である。断面中位から下位にかけて地山ブロックを混入する層が壁面側に観察できる。これは何らかの構造物を掘えた後、人為的に地山質土を埋めた痕跡と判断できることから、柱穴の可能性が高い。底面の土質はやや砂質気味であった。壁面下部はオーバーハング気味に掘削されており、若干袋状を呈する。P 1の検出時、調査区上端との比高差は10cm程度と浅く、これと対になる柱穴の痕跡を調査区外に求めてみたが、確認することはできなかった。



第4図 平成14・15年度調査区位置図 (S=1/3,000)

## 2. B 区

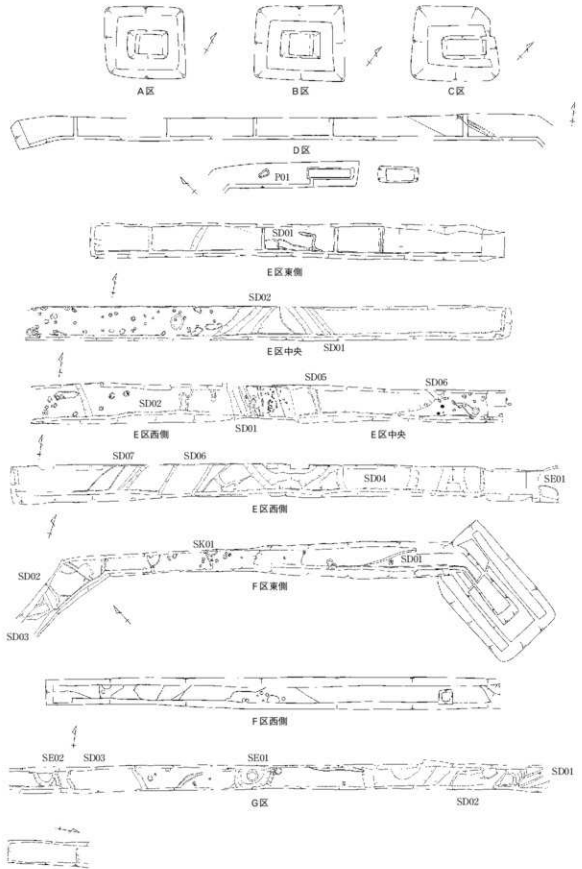
B区の大半は盛土直下で検出面となる。削平によって遺構の遺存状態は悪く、確認できたのは揚水機場箇所周辺と南に位置するSK2である。以下に掘立柱建物(SB)・土坑(SK)・溝(SD)・性格不明遺構(SX)・柱穴として認識できたものを中心に説明を加えていく。挿入の遺構番号に付した( )内の数字は深さを示す。

### SB1 (第8図)

揚水機場箇所検出した。総柱建物で、南北2間×東西2間を確認した。北への伸びは確認できなかった。東側に位置するP4の埋土は暗灰褐色粘土を基調としており、SB1のものに似ていることから柱穴を構成する可能性がある。周辺にも柱穴状を呈するピットを少なからず検出しているが、柱筋が揃わず、しまりのない砂質の埋土が多かったことから確定には至らなかった。時期のわかる遺物は出土していないが、柱穴の規模や近くで出土した土器から時期は中世と考える。

### SB2 (第7図)

B区北西端から南東へ40m付近で検出した。P13~15で構成されるが1.5m幅の調査区であるため



第5図 平成14年度調査区全体図 (S=1/300)

他方向への伸びは不明である。柱の痕跡と、地山ブロックを含んだ裏込め土と思われる土が3基とも観察できたことから柱穴の可能性が高いと判断した。P14・15の深さはそれぞれ30cm・23cmであるが、P13は50cmと深めである。柱間は3.5mを計測する。時期のわかる遺物は出土していないが、柱穴の規模や近くで出土した土器から時期は中世と考える。

#### S K 1 (第8・13・14図)

揚水機場箇所検出。平面形態は楕円形を呈し、検出高22.3m・長軸95cm以上・短軸80cm・深さ13cmを計測する。東部はピットに切れ底面には若干凹凸が観察できる。立ち上がりは緩く断面形態は歪みのある皿状を呈する。埋土である暗灰褐色粘土には炭化物が多く含まれていたことから何らかの火焼き行為を想定できる。遺物は土師皿(14)や珠洲焼の甕(19)の他、細片ではあるが土師器や青磁が出土している。木器では板材(35)が出土した。時期は中世である。

#### S K 2 (第10・13・14図)

B区南東端から北西へ20m付近で検出した。平面形態は調査区を横断する溝状を呈し、検出高22.3m・幅3m・深さ35cmを計測する。上端から20~25cm下がり楕円形を呈する2基の土坑が連結しており、その部分を2基のピットに切られたような形状を呈している。断面形態は平坦気味の坑底から鋭く屈曲しつつ上端に至る。盛土・包含層を除くと、埋土は炭化物を含む層(4~6・8層)、地山質土層(7・13層)、人為的痕跡が明瞭ではない(地山ブロックや炭化物などを含まない)自然崩落土層(9~12層)の3層に大きく分層できる。地山質土層→炭化物層という流れで2回堆積しており、基本的には13層→8層→7層→4~6層という順で堆積したと考える。S K 2 検出時、近辺に所在する館開野間遺跡で発見された区画溝に近い遺構と想定していたが自然堆積ではなく、人為的に埋められた堅穴状遺構であることが土層から観察できた。遺物は珠洲焼の鉢(1)や土師器の椀(4・11)の他、木器では箸(30)、板材ないし加工材(32~34・36~38)などが出土した。時期は中世である。

#### S D 3 (第7・8・13・14図)

揚水機場連結箇所検出。検出高22.4m・幅1.2m・深さ12cmを計測する。溝底が北から南へと傾斜していることから流路は南と考える。当初はS X 1と別な遺構と捉えていたが、調査途中で一連の遺構であることが判明した。溝中央には土坑状の浅い遺構が2基存在し、S D 3に切られていた。粒状の地山質土を含む暗灰褐色粘土を基調とした埋土である。遺物は土師器の皿(12)や珠洲焼の鉢(21)、杓文字(29)の他に土師器・珠洲焼の細片が出土した。時期は中世である。

#### S X 4 (第9・10・13図)

B区中央付近で検出した。検出高22.3~22.4m・南北10m・深さ30~40cmを計測する。以下、南壁土層(第10図)を基に説明を加える。当初は2・3層の暗灰褐色粘土を基調埋土として認識していたが、調査の結果、5層、6~8層、9~11層の計3遺構との切合いの他、2層と3層の間に時期差があることが判明した。堆積順は3層→6~8層→2層→9~11層→5層である。3層で古代の土器が出土しているが、6~8層で遺物の出土を確認できなかったことから各土層の所属時期は判然としなない。本来は2層と3層の上面で再検出すべきであったが、掘削中に捉えることはできなかった。

遺物は須恵器の有台杯(7)の他、土師器の細片が出土した。

## 柱穴（第7～9図）

B区中央、揚水機場周辺を中心に柱穴状の遺構を多数検出した。径30～40cm・深さ15～30cmの規模が多い。柱穴と判断した遺構については、実測図（ ）内に深さの計測値を記した。P3・4・6・8・9・11～19である。調査区が幅狭だったこともあり、建物復元はできていない。底面に柱痕跡を残すもの（P3・4・6・17・18）や掘り込みが深いもの（P13・19）が見受けられた。裏込め土に含まれる地山ブロックの量が多く、埋土である暗灰褐色粘土は若干濁った色調となることが多かったために検出は比較的容易であった。時期のわかる遺物は出土していないが、柱穴の規模や近くで出土した土器から時期は中世と考える。

## 3. C 区

C区もB区と同様、ほぼ盛土直下で検出面となる。B区との違いは、盛土と検出面の間に炭化物を含んだ褐灰色系粘土の堆積する箇所が調査区北西半で多く認められることである。以下、調査区壁土層①・②（第12図）を基に説明を加えていく。基本層序は耕土・盛土層（1～3、10～15層）と遺物包含層（4・6層）、それにP13（5層）など遺構埋土層の大きく3層に分かれる。1～3層と10～15層では土質が異なり、耕土・盛土層でも時期差が認められる。11～15層で畦状に高低差を確認できることから旧水田の区画を示すものと考えられる。4・6層は先述した暗灰褐色粘土のことである。少ないながらも遺物が検出できたことから遺物包含層と判断した。またP13の埋土、5層の堆積状況から4層と6層の間には時期差が認められる。

## SK1（第11・12図）

C区北西端から南東へ34m付近で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈すると思われ、検出高21.9m・長軸75cm以上・短軸90cm・深さ10cmを計測する。北側にある掘り込みには遺物包含層が堆積しており、SK1よりも新しい。坑底には凹凸が確認できる。埋土は炭化物を多量に含む黒褐色粘土の単一層であった。上面でアスファルト状の平たい石を検出した。調査区壁に突き刺さった状態であり、盛土の崩落する危険性があったため取上げはしていない。さらに掘り進めると、幅5cm・長さ30cm以上を計測する棒状の木器が2点、交差するような状態で出土した。これも調査区壁に突き刺さった状態だったために取上げはしなかった。遺物は木器の他、珠洲焼の甕や土師器片が出土した。時期は中世である。

## SK2（第11・14図）

C区SK1から南東へ11m付近で検出した。平面形態は円形を呈し、検出高22.4m・径56cm・深さ50cmを計測する。4層中位で上面の平らな大形の礫が水平にして置かれていたが、調査中に動いてしまったため標高値は記録できなかった。坑底はフラットに構築されている。埋土は暗灰褐色粘土を基調とし、地山ブロックや炭化物を含んでいた。遺物は瓦質の火鉢（22）の他、土師器片が出土した。時期は中世である。

## SD1（第11図）

C区北西端から南東へ11m付近で検出した。検出高22m・幅45cm・深さ18cmを計測する。東西方向に伸びており、溝底は西から東へ傾斜していた。断面形態は緩やかな碗底状を呈する。埋土は地山ブロックを少量含む黒褐色粘土の単一層であった。



SD 2 (第11・12図)

C区北西端から南東へ37m付近で検出した。北側でSK 1、南側にSD 3が隣接する。検出高21.9m・幅1.2m・深さ22cmを計測する。溝底は北東から南西へと傾斜し、北側は一段高くなっており深さは8cmを計測する。埋土は炭化物を含む暗灰褐色粘土の単一層であった。土師器片が出土した。

SD 3 (第11・12図)

SD 2南側で検出した。検出高21.9m・幅2.2m・深さ20cmを計測する。溝底は北東から南西へと傾斜し、南側は一段高くなっており深さは4cmを計測する。埋土はSD 2と同質だが若干淡く、灰色味が強い。遺物は珠洲焼の甕が出土した。

SX 1 (第11・12図)

C区北西端で検出した。検出高21.9m・長軸4.2m以上・深さ5cmを計測する。底面はわずかに南東から北西へと傾斜し、ビット状の遺構も確認しているが、切合いからSX 1よりは古いと考える。埋土は濁った暗灰褐色粘土を基調としており、切られている遺構に関しては黒褐色粘土であった。

SX 2 (第11図)

C区北西端で検出し、SD 1に隣接する。溝状を呈する。検出当初にSD 1と連結した遺構として認識していた。遺構番号を新たに付すのも記録上の混乱を招く可能性があるため、SXと記しつつも溝として報告する。検出高21.8m・幅1.4m・深さ20cmを計測する。溝底は北東から南西へと傾斜し、上端の南側ではビット状の遺構に切られている。埋土は褐灰色粘土を基調とする単一層であった。珠洲焼片・瀬戸焼片・土師器片が出土した。

ビット (第11・14図)

C区北西半で柱穴状の遺構を多数検出した。径30～40cmで深さは47～74cmとB区に比べて深く掘られているものが多い。柱穴と判断したビットについては実測図( )内に深さの計測値を記した。P 1～4・6がそれらに相当する。調査区が幅狭だったこともあり、建物復元はできていない。

P 1は濁った地山質土が充填されたような状態で検出した。下層になるにつれ黒味と粘性が強くなり、土師器の皿(27)が出土している。P 2の埋土は地山ブロックを多量に含む暗灰褐色粘土の単一層である。底面はフラットに仕上げられ、深さも74cmと最大である。P 3は埋土中位で礎板状の木製品を確認している。他の柱穴と比べて深さ26cmと浅い。P 4は半分以上が調査区外へと伸びており形状は不明である。規模は他の柱穴と比べ大きく、柱抜き取りの際に遺構の上端を掘り崩した可能性がある。P 6の埋土は暗灰褐色粘土を基調とする。約2m離れたP 2と建物を構成する可能性がある。

### 第3節 遺 物

遺構から出土した遺物が少なかったため、実測図は主に器種別で配列した。B区の土器は第13図に、B区の土器以外の遺物とC区の遺物は第14図に掲載した。

B区 (第13・14図)

1・4・11はSK 2、7がSX 4、12・21はSD 3、14・19がSK 1、その他は遺構外から出土した。1・2は珠洲焼の鉢である。1の外面はロクロナデにより凹凸が認められる。作りが丁寧で古手の様相を呈する。内面に1cm大の碟を観察できる。2の内面は磨耗顕著で、底部外面が静止糸切りで

ある。3は須恵器の蓋である。つまみと天井部外面は扁平気味に成形されている。4は土師器で器壁が厚く、底部外面は回転糸切りである。5～8は須恵器の有台杯である。胎土中には粗くて角張った砂粒が多く入る。5・6の器壁は7・8より薄く、作りも丁寧である。7・8は底部外面にヘラの筋が刻まれており、8には筋が2本、交差状に観察できた。9は須恵器の瓶と考える。整理中は壺と認識していたが底部内面に認められる自然軸の範囲が狭く、頸部が短いと判断したことから瓶とした。内面にはカキメが乱雑に施されている。内面に焦茶の付着物を確認でき、漆の可能性がある。10は製塩土器である。このほか棒状実底タイプも1点出土している。11は土師器の椀と考える。体部と底部の境はナデによる凹凸が認められる。底部の調整は不明瞭であるが、糸切りの痕跡をかくろうじて確認できる。12～16は土師器の皿で、底部はいずれも平坦である。14の底部は回転糸切りであり、古手の様相を呈している。12・13・15・16は体部にナデによる凹みが観察できる。15の体部は中位で屈曲し、その他は体部と口縁の境がやや直立気味に立ち上がる。いずれも時期は13～14世紀代と考える。17・18は手手である。指頭痕や被熱痕が残る。19は珠洲焼の甕である。21は珠洲焼の鉢である。作りは丁寧で、外面には波状文を交差させたような文様が櫛状工具で施されている。口縁端部は外側に若干内傾し、推定した口径の計測値も21cmと小さいことから中世前半に属する可能性が高い。

29はSD 3、30・32～34、36～38がSK 2、35がSK 1、31は遺構外から出土した。

29は杓文字である。つかむ部分の最大幅は3.5cmである。内側から外側へと全体を丁寧に面取りが施されている。30は箸である。上部は粗く、下部にいくにつれ丁寧な面取りが認められた。31は櫛である。挽曲式の横櫛で頭部は長方形を呈し、歯部は全て欠損していた。32～38は板材ないし加工材である。32～35・38は板材で、厚さは0.5cm前後のものが多い。32は下部に被熱痕を残す。38の側面中位で1箇所穿孔が施されており、孔径は1mmである。36・37は加工材である。36は断面で弧状になっている部分に加工が粗く施されており、下半は被熱して焦げが目立つ。

39・40は遺構外から出土した。39は鍛冶滓である。表面が粉っぽく断面の形状から椀形滓と思われるが、破面部分の認識が甘く実測図には表現できていない。B区周辺で鍛冶が行われていたことが窺える。40は粘土塊である。にぶい赤褐色を呈し、一部被熱で赤化している。胎土にはスサを含んでおり、何らかの炉材として使用されていた可能性がある。

### C区（第14図）

22はSK 2、27がP 1、その他は遺構外から出土した。

20は珠洲焼の甕である。口縁のくびれが明瞭で端部もやや長めに外反しており、中世でもやや古手の様相を呈している。22は瓦質の浅鉢である。口縁端部を内側に引き出し、幅のあるフラットな面を成形している。外面には2条の突帯をめぐらせ、その間には格子状の区画が施されている。火鉢として使用されたものと考えられる。23は青磁の碗で割花文が施されている。24は瀬戸の壺である。肩部に筋が4本並行して施されている。25～27は土師器の皿で、いずれも平底である。25は口縁に一段ナデが施され、その端部には煤が付着している。26の口縁には二段のナデが施され、その端部は断面三角形を呈する。27は体部に一段強めのナデを入れて屈曲させており、口縁で器壁は厚みを増す。形状的には15に近いと思われる。P 1を柱穴として認識しており27はその埋土下層から出土していることから、遺跡内遺構の時期評価という意味では貴重な資料である。時期は14世紀代と判断した。28は陶器の鉢である。立ち上がりに一段稜が成形され、すぐに外反して立ち上がるように思えないことから、皿というよりはむしろ鉢である可能性が高いと判断した。輪状の高台は幅広くしっかりと作られており、見込みに目は痕が2箇所確認できる。時期は近世後半以降と考える。

## 第4節 小 結

最後に集落域のまとまりを確認しておく。

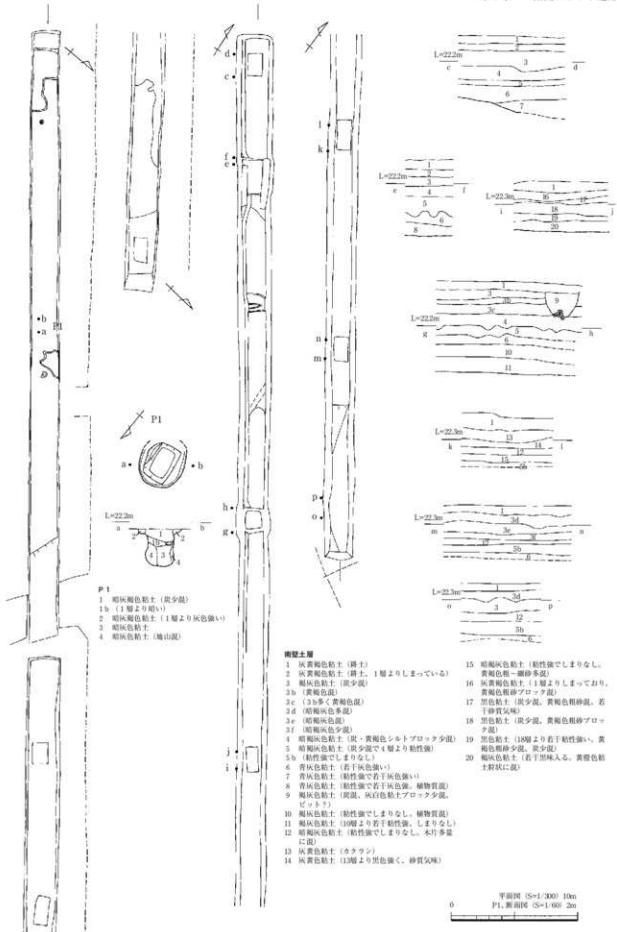
平成14年度調査（以下、H14）では、旧仏木川を挟んだ2つの集落跡が確認されている（第4・5図参照）。A・B・C・D区で旧仏木川の流路、その南岸にあたるE・G区では現仏木川を越えて展開する集落跡、対岸にあたるF区では現館開集落下に展開する集落跡が検出されている。

平成15年度調査（以下、H15）では、A区で旧仏木川の流路と柱穴（P1）を検出した。A区は遺跡の東端を示すものと判断した。B区の揚水機場箇所は調査と並行して工事が行われており、切土箇所から蛇行する河道の断面を観察できたことから、B区で検出した集落跡は旧仏木川の南岸に展開していたと想定できる。つまりA区南西端で検出した柱穴はB区と同じ遺構群である可能性が高い。C区で検出した集落跡は現仏木川を越えて展開するものとする。

以上の結果から遺跡内に3つのまとまりを想定でき、遺構出土遺物の時期を加味すると、

- ① 現館開集落下につながるH14F区（15世紀代）
- ② 現仏木川を挟むように展開していたH14E・G区とH15C区（13・14、16世紀）
- ③ 旧仏木川の南岸にあたるH15B区（13・14世紀）

となる。中世段階の館開集落の変遷を捉えることができたことが今回の調査成果の一つと考える。

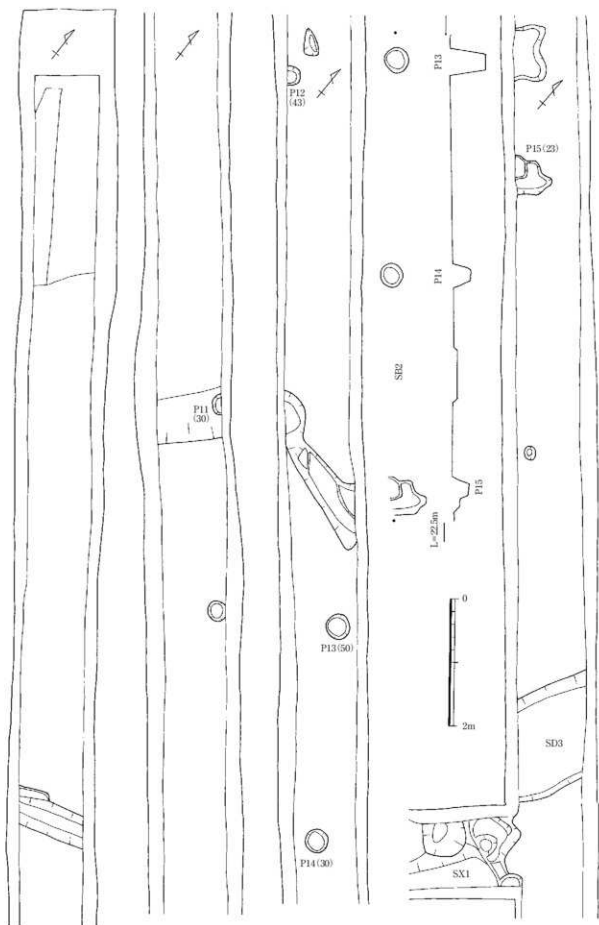


- P1
- 1 褐色粘土 (灰少説)
  - 1b (1層より灰)
  - 2 褐色粘土 (1層より灰色強い)
  - 3 褐色粘土
  - 4 褐色粘土 (地山説)

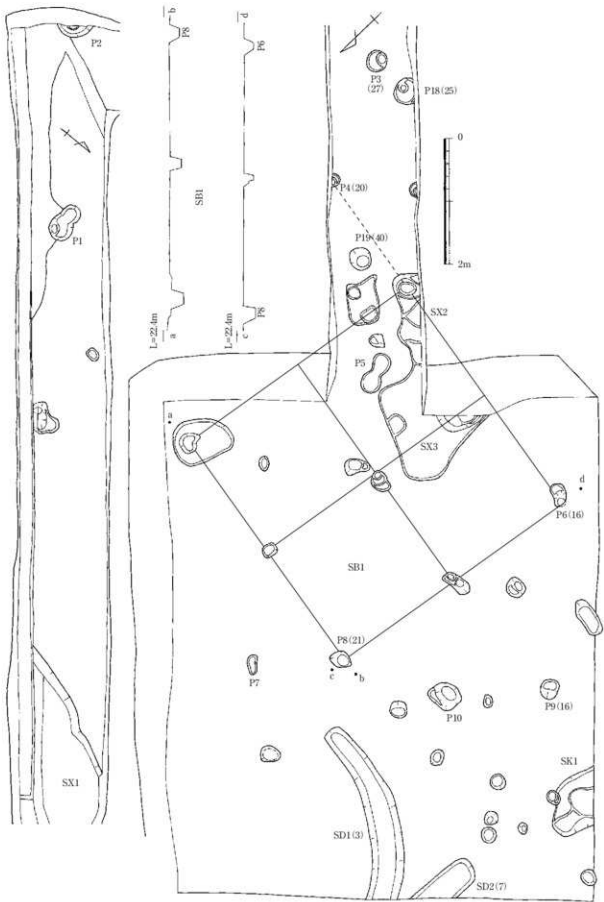
- 南壁土層
- 1 灰黄褐色粘土 (粘土)
  - 2 灰黄褐色粘土 (粘土, 1層よりしまっている)
  - 3 褐色粘土 (灰少説)
  - 3b (黄褐色)
  - 3c (3bより黄褐色)
  - 3d (暗褐色)
  - 3e (暗褐色)
  - 3f (暗褐色)
  - 4 褐色粘土 (灰・黄褐色シルトブロック少)
  - 5 褐色粘土 (灰少説で4層より粘性強い)
  - 5b (粘性強でしまりなし)
  - 6 青灰色粘土 (若干灰色強い)
  - 7 青灰色粘土 (粘性強で若干灰色強い)
  - 8 青灰色粘土 (粘性強で若干灰色強い, 植物質混)
  - 9 褐色粘土 (灰混, 灰白色粘土ブロック少混, ゼット)
  - 10 褐色粘土 (粘性強でしまりなし, 植物質混)
  - 11 褐色粘土 (10層より若干粘性強, しまりなし)
  - 12 褐色粘土 (粘性強でしまりなし, 木片多量に混)
  - 13 灰黄色粘土 (カタラン)
  - 14 灰黄色粘土 (1層より灰色強く, 砂質気味)
  - 15 褐色粘土 (粘性強でしまりなし, 黄褐色粗一層砂多混)
  - 16 灰黄褐色粘土 (1層よりしまっており, 黄褐色粗砂ブロック混)
  - 17 灰色粘土 (灰少説, 黄褐色粗砂, 若干砂質気味)
  - 18 灰色粘土 (灰少説, 黄褐色粗砂ブロック混)
  - 19 灰色粘土 (10層より若干粘性強い, 黄褐色粗砂少混, 灰少説)
  - 20 褐色粘土 (若干灰味入る, 黄褐色粘土粒状に混)

平面図 (S=1/300) 10m  
P1, 断面図 (S=1/60) 2m

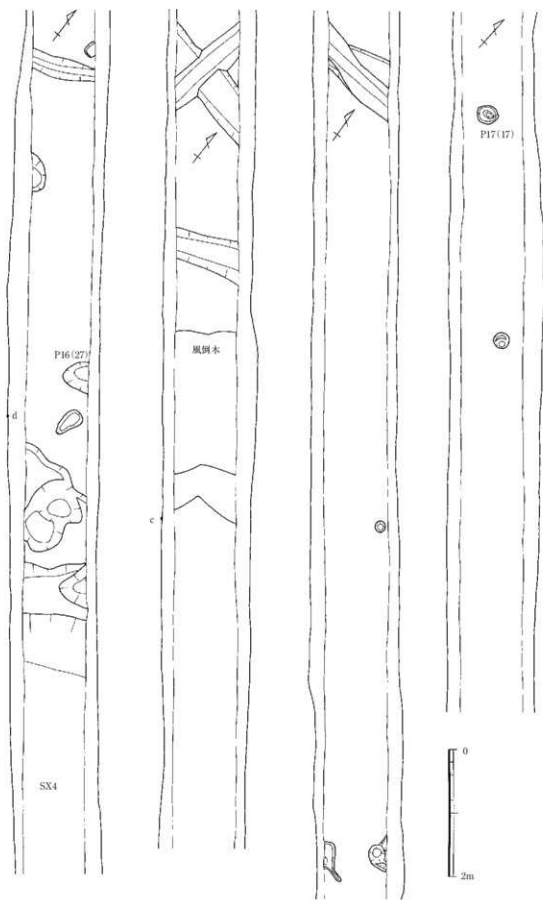
第6図 A区遺構実測図 (S=1/60・300)



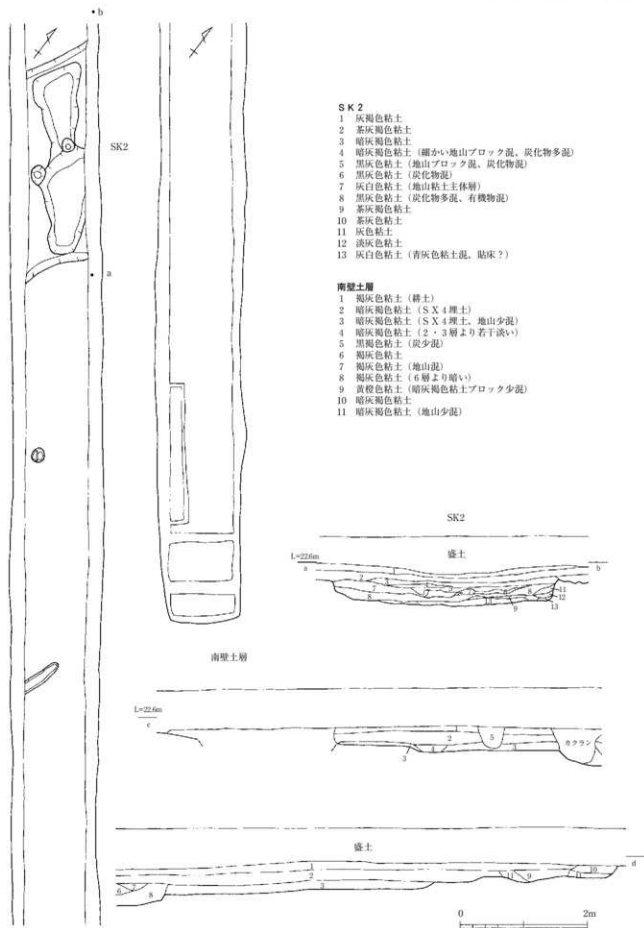
第7图 B区遺構実測図① (S=1/60)



第8図 B区遺構実測図② (S=1/60)



第9图 B区遺構実測图③ (S=1/60)



## SK2

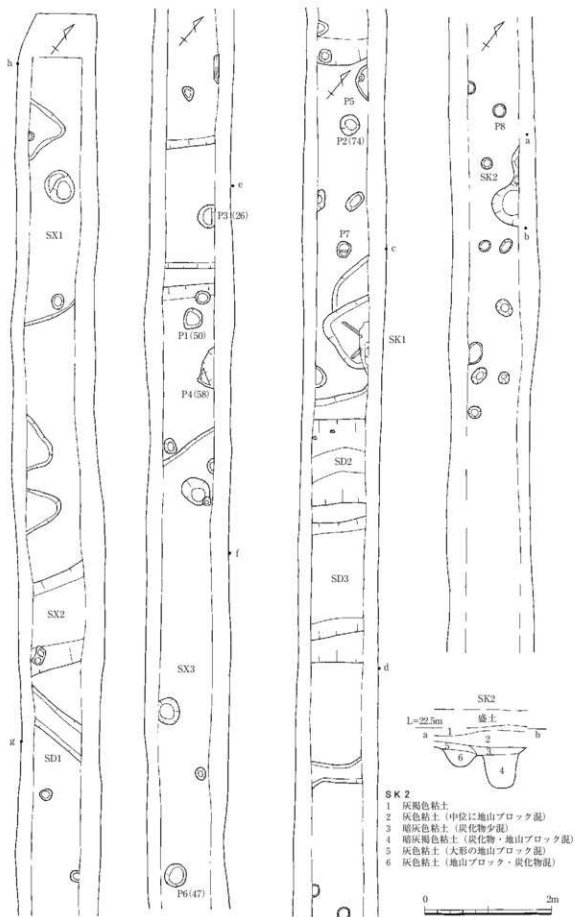
- 1 灰褐色粘土
- 2 茶灰色粘土
- 3 暗灰色粘土
- 4 暗灰色粘土 (細かい地山ブロック混、炭化物多混)
- 5 黒灰色粘土 (地山ブロック混、炭化物混)
- 6 黒灰色粘土 (炭化物混)
- 7 灰白色粘土 (地山粘土主体層)
- 8 黒灰色粘土 (炭化物多混、有機物混)
- 9 茶灰色粘土
- 10 茶灰色粘土
- 11 灰色粘土
- 12 淡灰色粘土
- 13 灰白色粘土 (青灰色粘土混、貼床?)

## 南壁土層

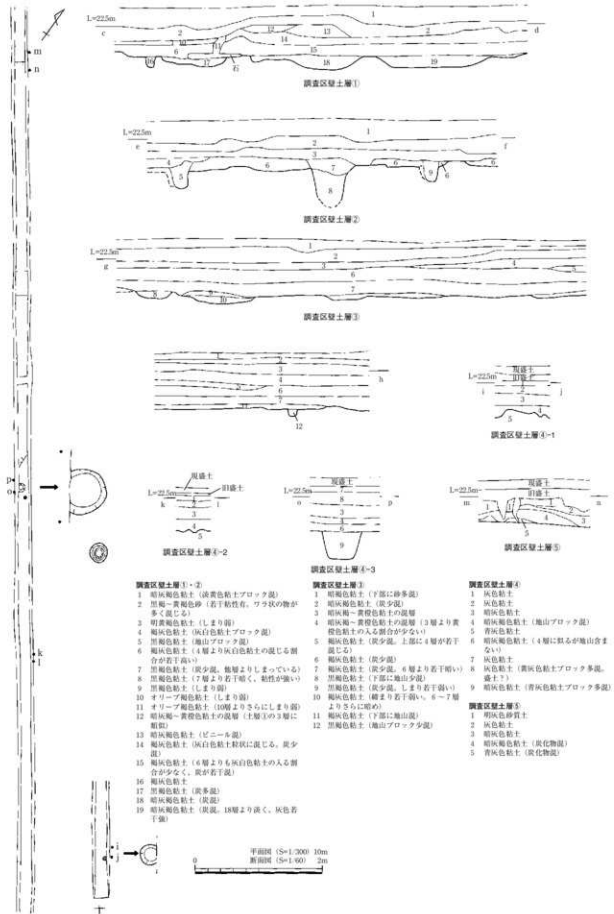
- 1 褐灰色粘土 (雑土)
- 2 暗灰色粘土 (S X 4 埋土)
- 3 暗灰色粘土 (S X 4 埋土、地山少混)
- 4 暗灰色粘土 (2・3 層より若干淡い)
- 5 黒褐色粘土 (炭少混)
- 6 褐灰色粘土
- 7 褐灰色粘土 (地山混)
- 8 褐灰色粘土 (6 層より暗い)
- 9 黄褐色粘土 (暗灰色粘土ブロック少混)
- 10 暗灰色粘土
- 11 暗灰色粘土 (地山少混)

第10図 B区遺構実測図④ (S=1/60)

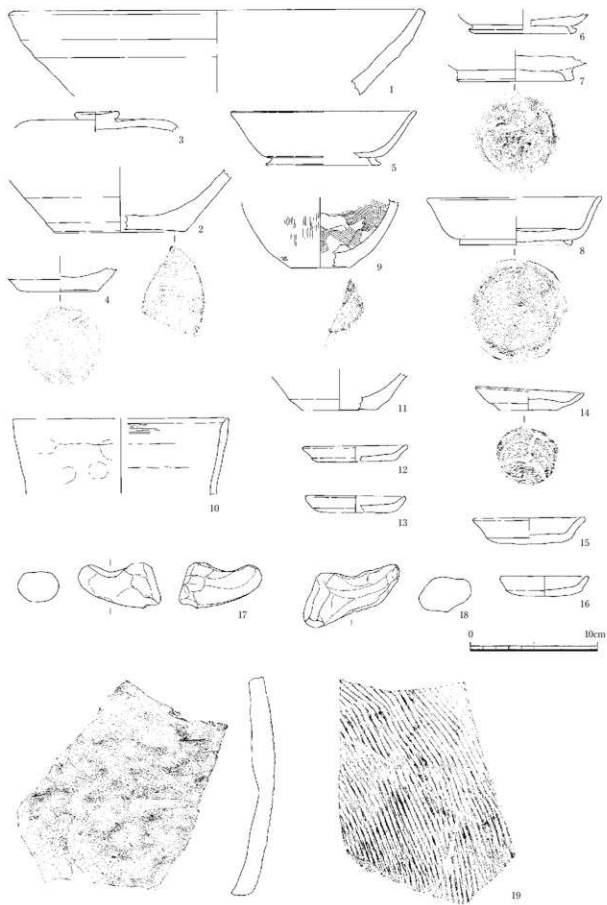




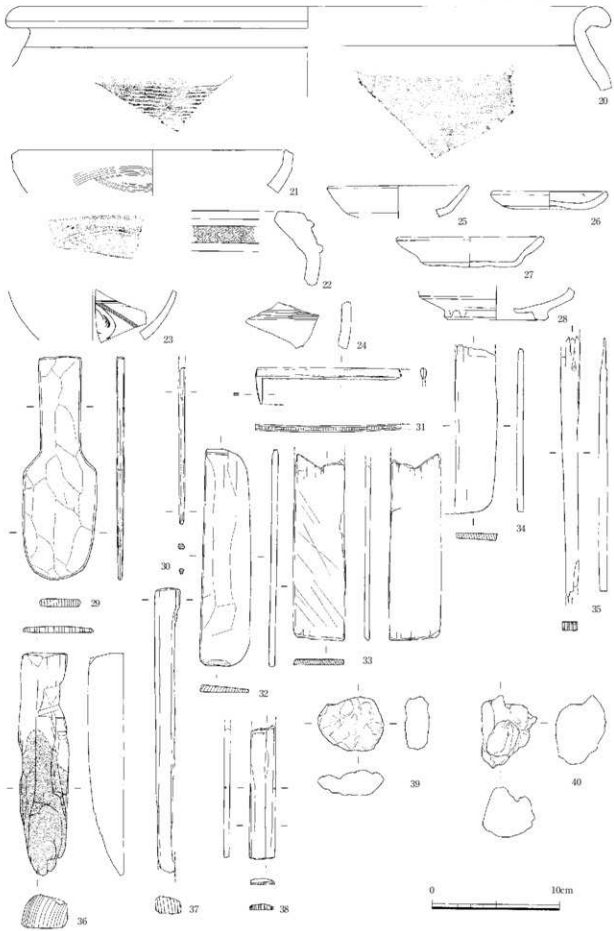
第11図 C区遺構実測図① (S=1/60)



第12図 C区遺構実測図② (S=1/60・300)



第13图 B区出土遗物实测图 (S=1/3)



第14図 B・C区出土遺物実測図 (S=1/3)

第2表 館間テラト遺跡遺物観察表①

報告番号	実測番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	備考
1	D-19	B区SK 2	鉢	珠 西 (32.1)	-	6.8		灰	灰白	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	D-40	B区表採	鉢	珠 西 (10.3)	-	4.9		オリーブ灰	青灰	細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	D-20	B区検出面	甕	須恵器	-	1.6		青灰	青灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	D-18	B区SK 2	碗	土師器	-	5.6	(1.8)	にぶい黄褐	にぶい褐	粗砂含	良	ナデ	ナデ	糸切り底
5	D-32	B区包含層	有台杯	須恵器 (14.5)	(8.7)	4.3		灰白	青灰	細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタクリ根ナデ
6	D-34	B区包含層	有台杯	須恵器	-	7.8	(1.6)	明青灰	明青灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタクリ根ナデ
7	D-16	B区SK 4西	有台杯	須恵器	-	8.6	(2.1)	灰白	灰白	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタクリ根ナデ
8	D-38	B区表採	有台杯	須恵器	13.5	8.7	3.9	青灰	青灰	細砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタクリ根ナデ
9	D-25	B区表採	瓶	須恵器	-	4.7	(5.4)	灰オリーブ	灰	細砂含	良	ハケ	ハケ	ナデ
10	D-24	B区表採	製塩	土師器	-	-	(6.0)	にぶい黄橙	灰白	細砂多含	並	ハケ、ナデ	ハケ	指節王痕
11	D-20	B区SK 2	碗	土師器	-	5.6	(2.9)	にぶい橙	にぶい黄橙	粗砂含	良	ナデ	ナデ	糸切り底
12	D-21	B区SD 3 SX 1	皿	土師器 (8.1)	(3.1)	(1.3)		橙	橙	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
13	D-27	B区包含層	皿	土師器 (7.3)	(3.9)	(1.3)		黒褐	灰黄	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
14	D-14	B区SK 1	皿	土師器	8.6	4.4	1.9	にぶい黄橙	浅黄橙	粗砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り底
15	D-35	B区盛土	皿	土師器 (8.6)	(1.5)	(2.1)		浅黄	にぶい黄	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
16	D-34	B区表採	皿	土師器	6.9	6.0	1.6	浅黄橙	浅黄橙	細砂含	良	ナデ	ナデ	ナデ
17	D-31	B区埋込	把手	土師器	-	-	-	浅黄橙	にぶい黄橙	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
18	D-30	B区表採	把手	土師器	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
19	D-15	B区SK 1	甕	珠 西 (17.3)	-	4.7		灰	灰	粗砂含	良	ナデ	ナデ	タタキ
20	D-30	C区埋立	甕	珠 西 (45.4)	-	6.8		灰	灰	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
21	D-22	B区SD1取上	鉢	珠 西 (21.0)	-	3.4		灰白	灰白	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
22	D-17	C区SK 2	鉢	瓦 貫 (61.2)	-	6.7		灰白	灰白	粗砂含	良	ロクロナデ	ロクロナデ	
23	D-37	C区検出面	碗	青 磁	-	-	-	-	-	-	-	施釉 (灰オリーブ)	施釉 (灰オリーブ)	
24	D-36	C区検出面	壺	瀬 戸	-	-	-	-	-	-	-	施釉 (オリーブ灰)	施釉 (オリーブ灰)	
25	D-36	C区検出面	皿	土師器 (10.9)	-	(2.3)		浅黄橙	灰白	粗砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	
26	D-37	C区表採	皿	土師器 (8.9)	(5.4)	(1.5)		灰白	にぶい黄橙	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
27	D-23	C区P 1 F別	皿	土師器	11.4	1.3	2.6	灰白	灰白	粗砂含	良	ナデ	ナデ	ナデオサエ
28	D-33	C区埋立	鉢	陶 器 (7.8)	(2.6)			-	-	-	-	施釉 (透明)	施釉 (透明)	

第3表 館間テラト遺跡遺物観察表②

報告番号	実測番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	備考
29	木-1	B区SD 3取上2	杓文字	17.7	5.9	0.6	
30	木-6	B区SK 2	箸	13.0	0.6	0.5	
31	木-2	B区包含層	罽	3.0	11.6	0.6	
32	木-8	B区SK 2	板 材	17.2	3.9	0.5	下部炭化
33	木-11	B区SK 2	板 材	14.8	4.2	0.4	
34	木-7	B区SK 2	板 材	13.4	3.4	0.5	
35	木-5	B区SK 1	板 材	20.7	1.5	0.7	
36	木-9	B区SK 2	加工材	17.6	4.0	2.8	下部炭化
37	木-10	B区SK 2	加工材	22.6	2.1	1.4	
38	木-12	B区SK 2	板 材	10.6	2.0	0.5	側面に穿孔
39	金-3	B区掘水機場包含層	鉄 滓	5.2	4.3	2.0	鍛冶滓
D-41	表採		硯土塊	4.5	4.4	4.0	

## 第4章 館開城跡

### 第1節 調査の概要

調査区はA・B区に分かれる(第15図)。A区はパイプライン埋設箇所中心上に1.5m幅の調査区を設定した。調査面積は20㎡である。B区は排水路敷設箇所中心上に1.5m幅の調査区を設定した。B区の排水路調査区のトレンチ幅が他のものより狭いのは、隣接していた道路路面の崩落を防止する必要があったためである。調査面積は30㎡であった。したがってA・B区の合計調査面積は50㎡となる。現況では他の水田面より1m以上比高差のある高台周縁に調査区が位置していたからか、同工区内の調査区よりは遺構・遺物の遺存状態が良好であった。A区では縄文時代の落とし穴1基(SK1)を検出した。B区では古墳時代の溝(SD2)を検出し、多量の土器が出土した。

### 第2節 遺構

#### 1. A区

A区は徳田川沿いの西岸に位置する。検出面までは盛土で、地山は礫を微量に含む黄橙色粘土であった。なお以下の説明で検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示している。

##### SK1(第16・17図)

調査区中央より南東寄りで見出された。SD1に切られる。平面形態は上面、坑底面とも隅丸長方形を呈する。検出高24.4m・長辺1.25m・短辺80cm・深さ52cmを計測する。さらに坑底中央でピットを検出した。平面形態は円形を呈し、検出高23.9m・径25cm・深さ28cmを計測する。坑底はほぼ平坦に作られており、中央に穿たれたピットの底面は緩やかな椀底状の断面形態を呈する。

埋土は5層に分層した。1・2層はしまりが弱くサラサラした掘りやすい土質で、3～5層はやや粘性が強い。3層は坑底中央のピット埋土で、断面図の底面レベルからさらに20cmほど地山が掘り抜かれている。また4・5層は地山ブロックの入り具合から人為的に埋めた堆積状況と観察できる。したがってSK1は一度掘削された後4・5層が埋められ、それから坑底中央のピットが掘削されたと想定でき、掘方の形状と土層から落とし穴の可能性が高いと判断した。

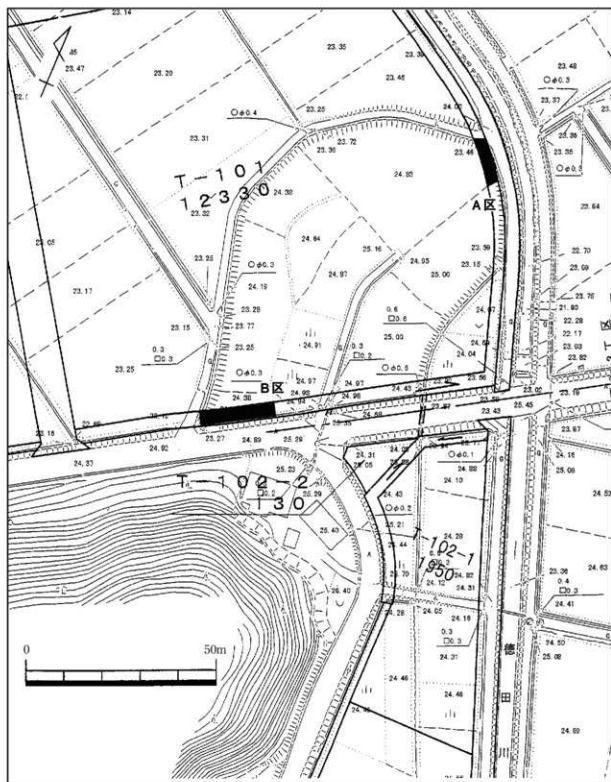
遺物は埋土下層で安山岩製の削器(19)が出土した。時期は縄文時代である。

##### P1(第16図)

P1は調査区中央で見出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、検出高24.3m・1辺60cm・深さ14cmを計測する。埋土は黒褐色粘土であった。遺物は出土していない。

##### SD1(第16図)

SD1はSK1を切った状態で見出された。検出高24.4m・幅20cm・深さ15cmを計測する。埋土は暗褐色粘土であった。遺物は出土していない。



第15图 調査区位置图 (S=1/1,000)

## 2. B 区

B区の大半はSD2で占められる。検出の際にはピット状の穴も確認しているが、木の根等による攪乱穴と判断した。盛土からおおよそ20cm下がりで検出面に至る。

### SK2 (第16図)

B区中央南西寄りで検出した。SD2の古墳時代前期～中期の灰褐色粘土層を切る。したがってSD2の埋没途中に掘り込まれた遺構と判断できる。平面形態は円形を呈し、検出高22m・径1m・深さ80cmを計測する。灰褐色粘土の上層と暗褐色粘土の下層とに大きく分層できる。埋土は礫や珪藻土ブロックを多量に含んでおり、特に断面図南壁土層の4層目に多い。土質の傾向はSD2も同様である。坑底は平坦に仕上げられ、壁面中位西側から南側にかけて緩い段を形成している。

遺物は出土していないが、SD2との切合いから時期は古墳時代前期～中期と考える。

### SD2 (第16図)

B区中央で検出した。検出高22.1m・幅1.6m・深さ80cmを計測する。溝底や壁面で凹凸を確認したが、別遺構の掘り込みとして認識できたのはSK2のみである。

セクションg-h間の断面図を基にして土層の説明を加える。基本層序は中世の暗灰褐色粘土層(1層)、古代の灰褐色粘土層(2層)、古墳時代中期の暗灰褐色粘土層(3層)、古墳時代前期～中期の灰褐色粘土層(4～7層)、古墳時代前期～中期の暗灰褐色粘土層(9層)、弥生時代後期～古墳時代前期の暗灰色砂礫層及び暗青灰色粘土層(8・10層)の6層に分層し、出土した土器で所属時期を判断した。4～7層は4・5層と6・7層に細分できる可能性はあるが、土質的に大きな相違を認めることはできなかった。土器は3・6・7層を上層、4・5・9層を下層として取り上げた。実測図として掲載した土器の大半は3層から出土したものである。埋土に珪藻土や礫を多く含んでいたが、人為的に掘り返したり埋め戻したりした痕跡も不明瞭であることから自然堆積と考える。

弥生時代後期～古墳時代中期の土器が多量に出土しているが、主体は古墳時代中期である。甕や壺の他、遺存状態が良好な小型壺や高杯も出土していることから、不必要になって廃棄したというよりはむしろ何らかの祭祀的行為に伴って土器を入れたという可能性が高い。

なお、遺構検出の際にB区北東端で溝状遺構を確認しSD1を付したが、非常に浅く掘方が不明瞭だったため遺構として扱わなかった。したがって観察表のB区SD1出土の土器は包含層出土遺物ということになる。

## 第3節 遺物

### SD2中・下層出土遺物 (第17図)

1～5は甕である。1は「く」の字口縁で頸部の屈曲は緩い。口縁端部はヨコナデによる面取りが施され、頸部内面はハケであるが接合痕は残存する。頸部以下の内面はケズリである。2・3は有段口縁の甕で口縁部は3cmと幅広である。2の口縁端はやや外反するが、3の口縁は直立気味に伸びている。4・5の口縁は「く」の字状を呈する。4の口縁端は面取りされ器壁厚だが、5の口縁端は丸みを帯び器壁薄めで、頸部の屈曲が強い。6～8は壺である。6は有段口縁の壺で内外面とも赤彩が施されている。口縁下端をやや突出させる。7は長頸壺で外面赤彩、ミガキが所々に観察できる。



体部の残存状況から球胴形を呈すると判断した。頸・体部の境には頸部をすほめる際にできたと思われるシワを縦方向にナデ消したような痕跡が認められた。8は肩部外面に縦方向、それ以下は横ないし斜方向のハケが施される。内面には指頭痕や接合痕が残存しており、ナデによる調整は雑である。体部は長胴形を呈すると考える。

9～11は甕の底部である。9・10は平底で器壁が厚い。10は内面調整の残りがよく、9よりも作りが丁寧である。スガが付着していることから煮炊き等に供されたと考えられる。11は9・10より器壁が薄く、時期差が認められる。12～15は高杯である。12・13は小型の高杯で、碗形をした杯部に「ハ」の字に開く脚部をもつ。12は扁平な器形と想定され、外面は赤彩である。13の脚部3箇所には穿孔が施され、孔径は1cmを計測する。内外面に斜方向ないし縦方向のミガキが施され、杯部内面には接合痕が認められた。脚部内面の接合痕は丁寧なハケ調整で消去されている。14は内外面赤彩でミガキは密に施されている。杯部の下半に稜が生じ、そこから緩く外反しながら立ち上がる。口縁端は丸く仕上げられる。15の脚部は「ハ」の字状に開き、端部で若干外反して接地する。縦方向のミガキが施され、裾部へいくにつれ横方向に多くなる。16・17は器台である。16は脚部に穿孔1箇所で孔径1cmを計測する。17も15と同様にわずかに外反して接地する。18は蓋で、頂部が小さく柱状を呈する。

1～18の時期は弥生時代後期～古墳時代前期に比定できる。

#### SD2 上層出土遺物 (第18～20図)

22・23・25～36は壺である。22・23は口縁下端が突出する山陰系の壺である。22の底部は平坦で体部は倒胴形を呈し、頸部を鋭く屈曲させて口縁には段をもつ。口縁は直立気味に伸びており、端部はやや尖り気味となる。口縁・体部外面と肩部内面は斜方向、頸部外面が縦方向、その他には横方向のハケが施される。法量に比して器壁が薄い印象を受けた。23の口縁は直立気味に立ち上がり、磨耗顕著だが内面にはハケ痕を留める。体部は22と同様な形状を呈する。24の実測図は傾きが若干ズレており、実際は口径が縮むように思われ、壺というよりはむしろ甕の可能性が高いと判断した。25の口縁は若干内湾し法量的には小型の壺に近い。26は直口壺である。外面が赤彩され内面には指頭痕が残る。頸・体部接着箇所の破損状況から判断して、実際の幅は実測図よりも縮む可能性が高い。27は器壁が薄く頸部内面には接合痕が1cm間隔で残存していた。体部は球胴形を呈する。

22～27の時期は古墳時代前期～中期に比定できる。

28～36は小型の壺である。口径が体部径を大きく超えることはなく、調整は内外面にヨコナデをかわらうじて観察できる程度で磨耗が顕著である。28の口縁は斜め上方に伸び、体部は倒胴形で底部が丸底を呈する。内面には接合痕が2～3cm間隔で残存していた。29の口縁は若干内湾し頸部が鋭く屈曲する。体部は算盤玉形、底部が丸底を呈する。肩部外面にミガキが施され、底部外面には赤彩痕を留める。30の体部は球胴形を呈する。内面に接合痕が残存し、外面にはケズリ痕を留める。31の口縁は斜め上方に伸び、体部が倒胴形で底部は丸底気味である。底部内面に接合痕を留める。32の口縁は内湾し頸部が屈曲する。体部は球胴形を呈し器壁が薄く、口縁内面には赤彩痕を留める。33の体部は算盤玉形を呈する。口縁内外面にハケ調整が残存し内面には接合痕を留める。34の口縁は内湾し頸部が鋭く屈曲する。体部は算盤玉形を呈し、体部外面下半にケズリ痕を留める。35の体部は最大径をやや中位にもち、底部は丸底気味である。体部外面にハケ痕を留める。36の頸部は鋭く屈曲し底部は丸底気味である。器壁は薄く肩部にハケ痕を留める。28～36の時期は古墳時代中期に比定できる。

37～55は高杯である。37の杯部は下半で屈曲し外反して上方へ伸び、口縁端を丸くおさめる。脚部は裾に向けて徐々に外反するが明瞭な屈曲は認められない。全形は窺えないが穿孔を1箇所確認し、

孔径は1.2cmを計測する。内外面に赤彩とハケ後のミガキが施され、脚部内面の接合痕は調整によって消去されている。器形的に他の高杯よりも古手の様相を呈する。38～41、44・47・48は杯部が下半で屈曲し、脚裾部で強く屈曲外反する成形技法を基本とする。脚部内面の接合痕は残存することが多く、37と比べ調整が雑な傾向にある。38は杯部外面に斜方向、脚部に縦方向のミガキが施される。脚部が中位で若干幅厚となる。脚部内面の接合痕は1.8～2cm間隔で残存していた。39の杯部外面は下半でやや内側へ凹みが生じ、杯部外面にはハケ痕を留める。40の杯部立ち上がりは中位で外反気味となり、ハケ後のミガキが斜方向に施される。脚部は縦方向のミガキが施され、裾部の屈曲は他よりも鋭い。脚部内面に接合痕を確認できる。41の器壁は薄く磨耗によるものと考えられる。脚部内面の中位からやや上で段が成形され、接合痕を留める。色調は比較的赤味が強い。42・43は杯底部である。42は脚部との接合部分が欠損している。43の外面の色調はくすんでいるが、内面は赤味が強く好対照となっている。44の杯部は外面斜方向のミガキが施され、内面にはハケ痕を留める。杯部外面に接合痕が確認できる。脚部はやや中膨みとなり、外面には縦方向のミガキが施されている。脚部内面の接合痕は1cmないし2cmの間隔で残存し、脚端部から杯部まで計5段の輪積みを確認した。

45は脚部で裾に向けて器壁が極端に薄まっていく。46の脚部内面の接合痕は1～1.2cmの間隔で残存し、脚端部から杯部まで計6段の輪積みを確認した。44と同様に形状がやや中膨みとなっている。47の杯部口縁端はわずかに外反する。脚部は他のものと比べて幅厚であった。48は他の高杯と比べ赤味が強い。杯部下半に稜が生じ屈曲部分は明瞭で、立ち上がりが直線的で伸びは短い。杯部と脚部の接合部分は杯底部から3cmと長めで、器壁の厚さがほぼ均一に保たれている。他の高杯と比べ作りが丁寧な印象を受けた。49～55は脚部である。49は外面に斜方向の、50は外面に縦方向のミガキが施される。49・50の内面には接合痕が1cm間隔で残存しており、縦方向に粗いナデが施されていた。51は外面に斜方向のミガキが施され、内面の接合痕は2cm間隔と他の高杯よりも広めである。縦方向のナデにもかかわらず接合痕や上半のシボリメは残存する。52・53は外面に赤彩痕が留まる。52の杯部底面には深い凹みがあり、53は裾部に向けての開きが大きく、やや古手の様相を呈する。54は49と同様な形状・調整であるが、裾部に向けての開きが若干大きいように見受けられた。55はやや大きめで、外面に斜方向のミガキが施され、内面の接合痕は0.5～1cmの間隔で残存し、脚端部から杯部まで計9段の輪積みを確認した。

37～55の時期は古墳時代中期に比定できるが、37や53は若干古手の様相を呈する。

56・57は器台で裾部は「ハ」の字状に開く。56は脚端部で屈曲外反する。57には穿孔が1箇所あり孔径1cmを計測する。色調が暗めのピンク色で他の土器と異質である。56・57の時期は弥生時代後期～古墳時代前期に比定できる。58～63は甕である。58は有段口縁の甕である。口縁は直立気味に伸び、体部は倒卵形を呈する。頸部内面までしっかりとケズリが入る。59～63は口縁が「く」の字を呈する甕である。59は小型の甕で体部中位が張っている。口縁は直立気味に伸び、底部は丸底気味である。60の口縁は外反し、体部は球胴形を呈する。底部は丸底で、体部外面に縦方向のハケが施される。肩部内面に接合痕が残存する。61の口縁端は丸く短めに引き出される。外面のハケは斜方向の後、縦方向に施されるが内面のハケは不明瞭で、接合痕は残存している。体部は長胴形を呈する可能性がある。62は頸部のくびれが強い。調整は不明だが同一個体と思われる破片から、体部外面はハケで内部がケズリと想定できる。63の器壁は薄く肩部内面に接合痕が1cm間隔で残存する。58～63の時期は古墳時代前期～中期に比定できる。64～68は底部である。64は甕で胎土に礫が多量に含まれ、底部の穿孔径は1cmを計測する。66は平底の底部で壺の可能性がある。67は甕の底部と考える。底部外面はへらで十字状の筋が刻まれている。69は須臾器の甕で、70・71は珠洲焼の挿棗である。70の時期は御目から

15世紀代と考える。

#### 土器以外の出土遺物（第17回）

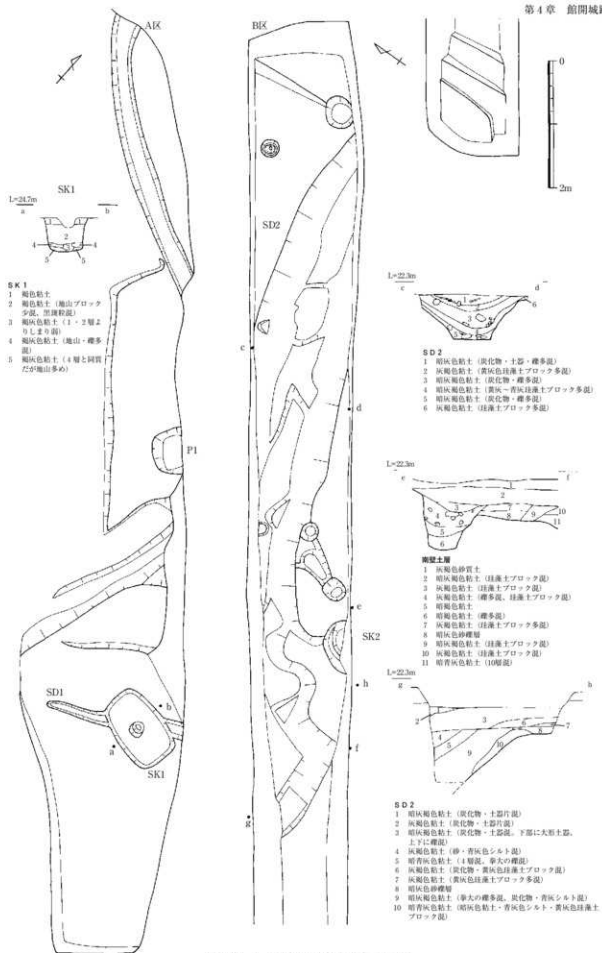
19は安山岩製の削器でA区SK1から出土した。最大長11.5cm・最大幅7.9cm・最大厚3.1cmを計測し、重量は179.5gを計量する。20は安山岩製の石鏃でB区SD2の中・下層から出土した。最大長3cm・最大幅2cm・最大厚0.3cmを計測し、重量は1.2gを計量する。21は鍛冶洋で側面に工具痕を確認した。最大長5.8cm・最大幅4.3cm・最大厚2.5cmを計測し、重量は63.6gを計量する。

### 第4節 小 結

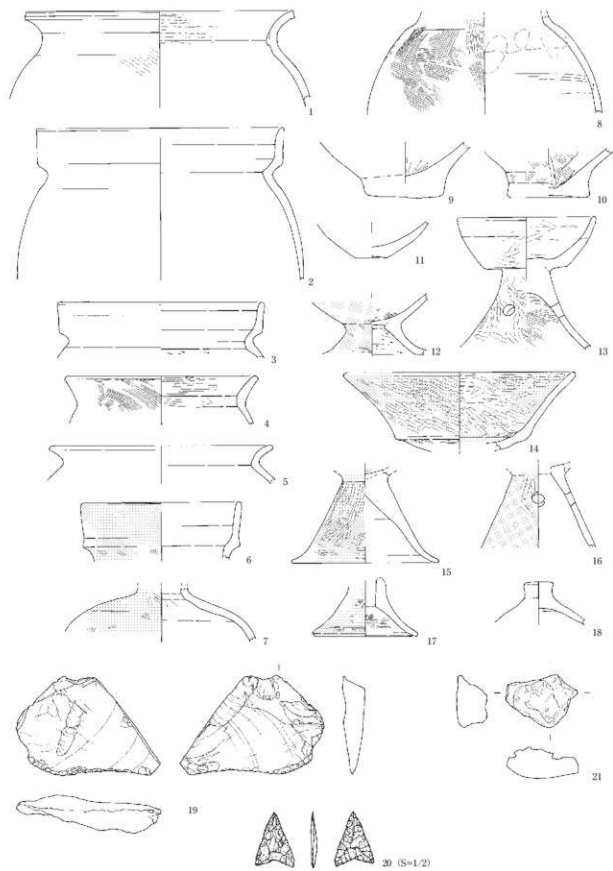
SK1では縄文時代の落とし穴を検出した。SD2では弥生時代後期～古墳時代中期の遺物が堆積しており、その大半は古墳時代中期であった。SD2は往時、蛇行しながら丘陵裾を沿うようにして伸びていた可能性が高い。調査区の位置する高台は周囲との比高差が1m以上あり、調査区周辺の現況地面の観察結果から、沼地もしくは鞍部が高台を沿うようにして展開していたことが想定できる。中世の遺跡として知られる館開城跡であるが、縄文時代・古墳時代の遺構・遺物も確認できた。中世の遺物が出土しているにもかかわらず、館跡とのつながりを窺わせる遺構は検出できなかった。

第4表 館開城跡遺物観察表①

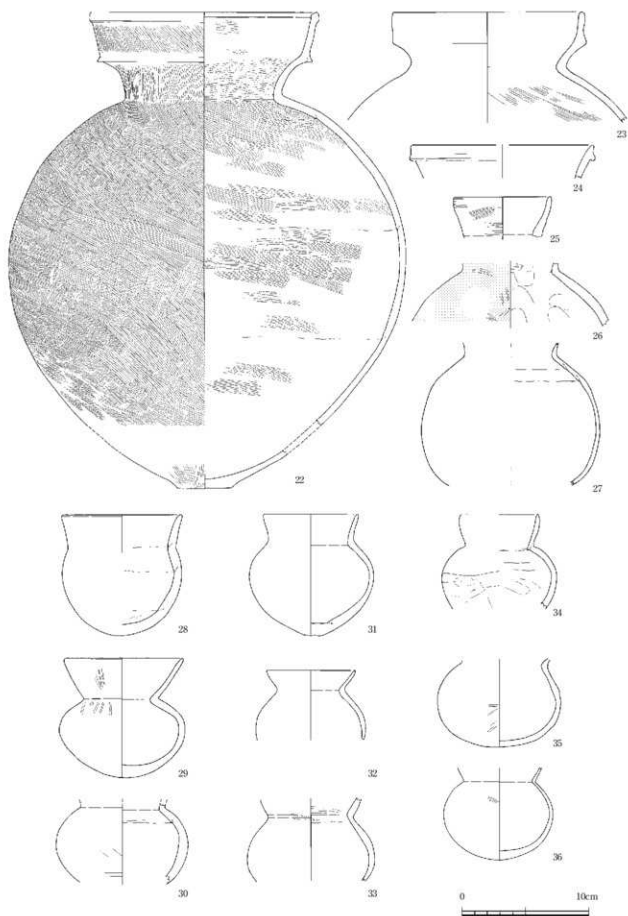
報告番号	実測番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	備考
1	C-5	原SD2中-F層	壺	土師器	21.0	-	(7.7)	灰黄	にぶい黄橙	糠・粗砂含	良	ヨコナテケズリ	ヨコナテハケ後ナテ	海船跡付含む
2	C-3	原SD2中-F層	壺	土師器	19.5	-	-	灰白	にぶい黄橙	糠多含、粗砂少含	良	ヨコナテ	ヨコナテ	海船跡付、焼土塊含む
3	C-39	原SD1中-F層	壺	土師器	16.0	-	(4.4)	にぶい黄橙	灰黄緑	糠含、粗砂少含	良	ヨコナテケズリ	ヨコナテケズリ	海船跡付多含む
4	C-05	原SD2中-F層	壺	土師器	14.9	-	(3.9)	にぶい黄橙	灰黄緑	糠含、粗砂少含	良	ヨコナテケズリ	ナテハケメ	海船跡付、焼土塊含む
5	C-54	原SD2中-F層	壺	土師器	(17.2)	-	(3.0)	にぶい黄橙	暗灰	糠・粗砂少含	良	ヨコナテ	ヨコナテ	海船跡付含む
6	C-42	原SD2中-F層	壺	土師器	12.4	-	(4.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	糠多含、粗砂少含	良	ミガキ	ミガキ	海船跡付含む
7	C-6	原SD2中-F層	壺	土師器	-	-	(3.0)	暗灰	暗赤	糠・粗砂少含	良	ナテ	ミガキ	海船跡付に比ぶ
8	C-8	原SD2中-F層	壺	土師器	-	-	(7.9)	灰黄	にぶい黄橙	粗砂少含	良	ヨコナテナテ	ヨコナテハケメ	海船跡付、焼土塊含む
9	C-02	原SD2中-F層	底部	土師器	-	6.1	(4.3)	灰白	灰白	糠多含、粗砂少含	良	納耗	ナテ	海船跡付含む
10	C-43	原SD2中-F層	底部	土師器	-	5.9	(3.9)	にぶい黄橙	灰黄緑	糠多含、粗砂少含	良	ハケ後ナテ	ハケ後ナテ	海船跡付、焼土塊含む
11	C-03	原SD2中-F層	底部	土師器	-	2.5	(2.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	糠・粗砂多含、粗砂少含	良	納耗	納耗	海船跡付、赤色粒含む
12	C-38	原SD2中-F層	高杯	土師器	-	-	(4.9)	にぶい黄橙	赤黒	糠・粗砂少含	良	ミガキ?ケズリナテ	ミガキ(赤黒)	海船跡付含む
13	C-7	原SD2中-F層	高杯	土師器	10.8	-	(10.9)	(作部)灰白(脚部)浅黄橙	浅黄橙	糠・粗砂含	良	ミガキナテ	ミガキ	海船跡付含む
14	C-46	原SD2中-F層	高杯	土師器	18.0	-	(6.1)	にぶい黄橙	灰黄	糠多含、粗砂少含	良	ミガキ	ミガキ	海船跡付含む
15	C-40	原SD2中-F層	高杯	土師器	-	11.3	(7.4)	灰黄	灰黄(赤)	粗砂少含	良	ナテ	ヨコナテ	海船跡付、焼土塊含む
16	C-9	原SD2中-F層	器台	土師器	-	-	(6.0)	灰白(橙)	灰白	糠・粗砂少含	良	ミガキ	ミガキ	海船跡付含む
17	C-41	原SD2中-F層	器台	土師器	-	8.0	(4.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂含、粗砂少含	良	ハケ、ナテ	ハケ	海船跡付含む
18	C-4	原SD2中-F層	蓋	土師器	2.2	-	(3.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	糠含、粗砂多含	良	納耗	納耗	赤色粒含む
22	C-06	原SD2上層	壺	土師器	33.7	8.6	7.5	にぶい黄橙	橙	糠やや多含	良	ヨコナテハケ	ヨコナテハケ	海船跡付、焼土塊含む
23	C-04	原SD2上層E3	壺	土師器	15.0	-	(8.8)	浅黄緑	にぶい橙	糠・粗砂多含	良	ヨコナテハケ	ヨコナテハケ	海船跡付含む
24	D-13	原SD2上中層	壺?	土師器	(14.3)	-	(2.6)	灰黄	灰黄	糠含、粗砂少含	良	ヨコナテ	ヨコナテ	海船跡付多含む
25	D-12	原SD2上層E6	壺	土師器	7.7	-	(3.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多含	並	ナテハケ	ナテハケ	海船跡付多含む
26	D-11	原SD2上層E6	壺	土師器	-	-	(5.0)	にぶい黄橙	赤黒(赤黒)	粗砂含	並	ミガキナテ	ミガキ	海船跡付多含む
27	C-19	原SD1(浅黄帯)	壺	土師器	-	-	(11.3)	暗灰	暗赤	糠・粗砂含	良	納耗	納耗	海船跡付含む
28	C-25	原SD1(浅黄帯)	小壺	土師器	9.4	-	9.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂やや多含	良	納耗	納耗	海船跡付含む



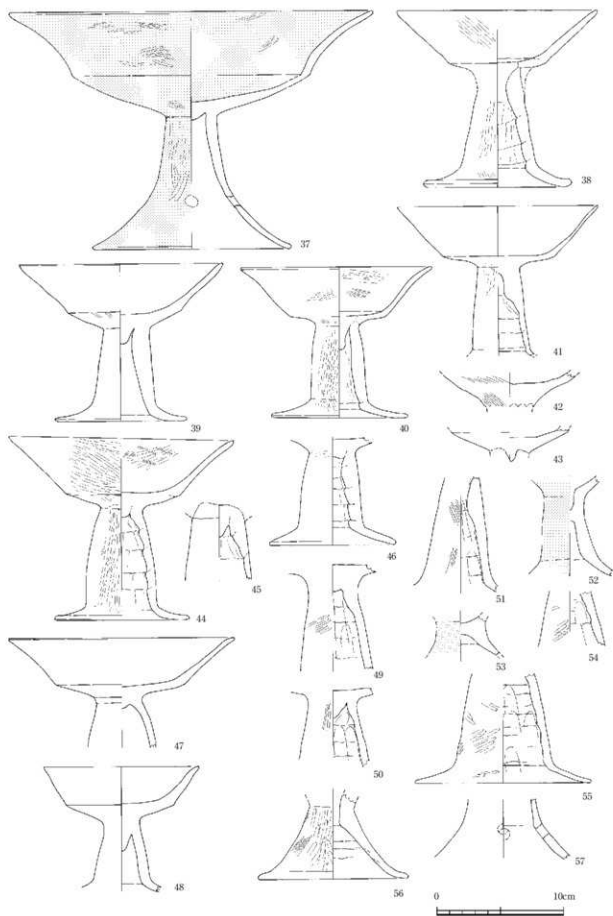
第16図 A・B区遺構実測図（S=1/60）



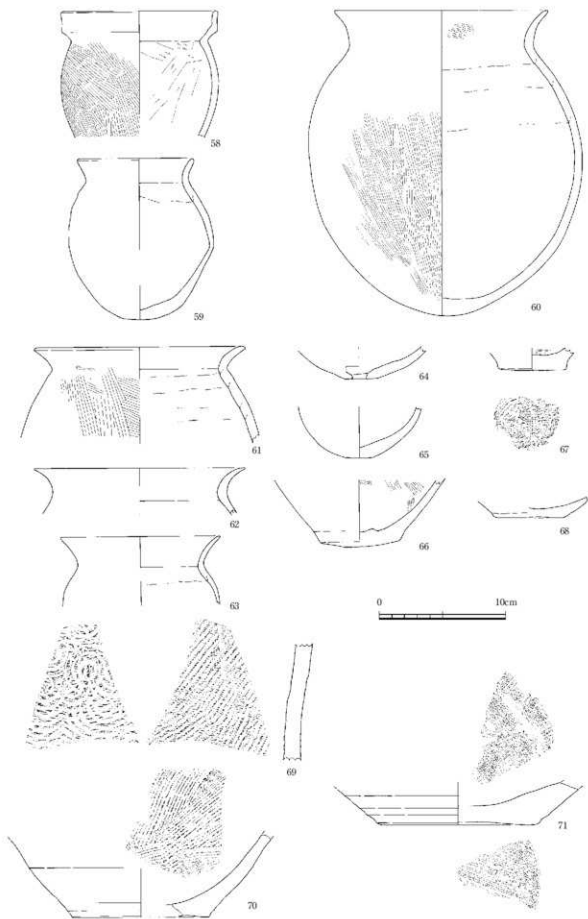
第17图 SD2中·下層等出土物実測図 (S=1/2·3)



第18図 S D 2上層出土遺物実測図① (S=1/3)



第19图 S D 2上層出土遺物実測図② (S=1/3)



第20回 SD 2 上層等出土遺物実測図③ (S=1/3)



第4表 館開跡遺物観察表2

29	C-2	原SD1土曜L3	小室	土曜部	9.5	-	9.5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多含	良	ナア	ハケ	海綿質, 赤色粒含む	
30	C-10	原SD1土曜L4	小室	土曜部	-	-	66.0	灰	にぶい黄橙	薄・粗砂・細砂少含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
31	C-45	原SD2土曜L1	小室	土曜部	7.4	1.5	9.6	橙	浅黄橙	細砂中多含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
32	C-13	原SD2土曜L2	小室	土曜部	7.0	-	65.9	灰	黄橙	薄少含	良	納托	ハケメ	海綿質, 赤色粒含む	
33	C-51	原SD2土曜L1	小室	土曜部	-	-	66.7	橙	橙	薄・粗砂・細砂少含	良	ナア	ヨコナア	海綿質, 黄土塊含む	
34	C-15	原SD2土曜L2	小室	土曜部	6.1	-	47.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂少含	良	ヨコナア ナア ケズリ	ナア ケズリ	海綿質, 赤色粒含む	
35	C-28	原SD2土曜L1-2	小室	土曜部	-	-	67.8	橙	橙	薄・粗砂少含	良	納托	ミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
36	C-11	原SD2土曜L1	小室	土曜部	-	-	67.0	黄灰	にぶい黄橙	細砂少含	良	納托	納托	海綿質, 黄土塊含む	
37	C-37	原SD2土曜L1	高杯	土曜部	28.8	15.4	18.9	にぶい橙	にぶい橙	細砂・粗砂少含	良	ハケ後ミギキ	ハケ後ミギキ	海綿質, 赤色粒含む 右: 内層部赤色土あり 節は不明	
38	C-14	原SD2土曜L1	高杯	土曜部	15.9	11.7	(14.1)	橙	橙	粗砂やや多含	良	ヘラミギキ	ヘラミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
39	C-1	原SD2土曜L1-4	高杯	土曜部	16.1	10.0	12.5	にぶい橙	にぶい橙	粗砂少含	悪	ナア	ハケ, ナア	赤色土含む	
40	D-1	原SD2土曜L2	高杯	土曜部	15.0	10.8	12.0	橙	橙	粗砂少含	良	ハケ後 ヘラミギキ ヨコナア	ハケ後 ヘラミギキ ヨコナア	海綿質, 黄土塊含む	
41	C-17	原SD2土曜L2	高杯	土曜部	(15.8)	-	(11.8)	橙	橙	粗砂やや多含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
42	C-26	原SD2土曜L3	高杯	土曜部	-	-	(2.5)	橙	橙	薄・粗砂多含	良	納托	ハケ	海綿質, 赤色粒含む	
43	C-90	原SD2土曜L2	高杯	土曜部	-	-	(1.9)	明本層	明本層	粗砂やや多含	良	納托	納托	海綿質, 黄土塊含む	
44	C-22	原SD2土曜L2	高杯	土曜部	17.8	10.7	14.6	明黄橙	明黄橙	薄少含	良	ハケ後 ヘラミギキ	ヘラミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
45	D-3	原SD1土曜L1	高杯	土曜部	-	-	14.9	橙	橙	細砂やや多含	良	納托	納托	海綿質, 黄土塊含む	
46	C-18	原SD1土曜L2	高杯	土曜部	-	-	10.0	8.1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂少含	良	ヨコナア ナア	ヨコナア ナア	海綿質, 赤色粒含む
47	C-36	原SD1土曜L1-4	高杯	土曜部	17.8	-	(8.5)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少含	悪	ナア	納托	海綿質, 赤色土含む	
48	C-23	原SD2土曜L1	高杯	土曜部	12.4	-	(9.9)	橙	橙	薄・粗砂多含	良	シズリメ	シズリメ	海綿質, 赤色粒含む	
49	C-31	原SD2土曜L1-6	高杯	土曜部	-	-	(8.2)	橙	橙	細砂含	悪	シズリメ ナアオサエ	シズリメ ナアオサエ	海綿質, 赤色粒含む	
50	C-33	原SD2土曜L1-6	高杯	土曜部	-	-	(6.3)	橙	橙	細砂含	悪	ナアオサエ	ナア ミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
51	C-35	原SD2土曜L1-6	高杯	土曜部	-	-	(9.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多含	悪	ナアオサエ シズリメ ナア	ナア ミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
52	C-44	原SD2土曜L1-7	高杯	土曜部	-	-	(8.0)	淡橙	灰白	薄多含	良	納托	ミギキ	海綿質, 赤色粒含む 赤色土	
53	C-49	原SD2土曜L1-8	高杯	土曜部	-	-	(3.2)	にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	薄少含	良	ナア	ミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
54	C-34	原SD2土曜L1-8	高杯	土曜部	-	-	(4.2)	黄灰	黄灰	細砂含	悪	ナアオサエ	ナア ミギキ	海綿質, 赤色粒含む	
55	C-32	原SD2土曜L1-8	高杯	土曜部	-	-	14.0	(8.7)	黄灰橙	黄灰橙	細砂含	悪	ナアオサエ ヨコナア	ナア ミギキ	海綿質, 赤色粒含む 底部 2号
56	C-12	原SD2土曜L1	舞台	土曜部	-	-	(11.0)	(6.7)	にぶい橙	灰黄橙	薄・粗砂・細砂少含	良	ナア	ハケ後ミギキ	海綿質, 赤色粒含む
57	C-27	原SD2土曜L1-9	舞台	土曜部	-	-	4.5	赤橙	赤橙	細砂少含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
58	C-20	原SD2土曜L1-10	舞台	土曜部	12.4	-	(10.1)	暗灰	黄灰	薄やや多含	良	ヨコナア ケズリ	ナア ハケ	海綿質, 赤色粒含む	
59	C-29	原SD2土曜L1-11	舞台	土曜部	9.0	-	12.8	明本層	明本層	薄・粗砂多含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
60	D-9	原SD2土曜L1-12	舞台	土曜部	17.0	-	24.3	橙	橙	薄やや多含	良	納托	ハケ	海綿質, 赤色粒含む	
61	D-4	原SD2土曜L1-13	舞台	土曜部	16.7	-	7.0	橙	橙	粗砂やや多含	良	ヨコナア	ヨコナア	海綿質, 赤色粒含む	
62	C-30	原SD2土曜L1-14	舞台	土曜部	16.8	-	(3.7)	灰	黄灰	薄・粗砂多含	良	ヨコナア	ヨコナア	海綿質, 赤色粒含む	
63	C-16	原SD2土曜L1-15	舞台	土曜部	12.6	-	(5.9)	にぶい橙	にぶい橙	粗砂やや多含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む	
64	C-48	原SD2土曜L1-16	舞台	土曜部	-	-	2.6	(2.6)	浅黄橙	浅黄橙	薄多含	良	ナア	納托	海綿質, 赤色粒含む
65	D-2	原SD2土曜L1-17	底部	土曜部	-	-	22.0	14.0	橙	橙	薄・粗砂やや多含	良	納托	納托	海綿質, 赤色粒含む
66	C-47	原SD2土曜L1-18	底部	土曜部	-	-	6.3	(5.9)	にぶい橙	にぶい橙	薄・粗砂少含	良	ハケメ	ハケメ	海綿質, 赤色粒含む
67	D-5	原SD2土曜L1-19	底部	土曜部	-	-	5.3	(1.4)	黄灰	黄灰	細砂少含	良	ハケ	納托	海綿質, 赤色粒含む
68	C-21	原SD2土曜L1-20	底部	土曜部	-	-	5.5	(1.9)	浅黄橙	浅黄橙	薄少含	良	納托	納托	黄土塊含む
69	D-7	原SD2土曜L1-21	埋	埋土部	-	-	-	-	灰	灰	粗砂・細砂少含	良	タケキ	タケキ	海綿質, 赤色粒含む
70	D-6	原SD2土曜L1-22	埋	埋土部	-	-	10.9	(6.2)	灰	灰	薄少含	良	ヨロシメ	ヨロシメ	海綿質, 赤色粒含む
71	D-8	原SD2土曜L1-23	埋	埋土部	-	-	13.0	(2.8)	灰	灰	薄少含・粗砂・細砂やや多含	良	オロシメ	ロクロナア	海綿質, 赤色粒含む

## 第5章 仏木新林遺跡

### 第1節 調査の概要

調査区は遺跡の立地する丘陵の裾部に位置する。排水路敷設箇所中心上に2m幅の調査区を設定した(第21図)。調査面積は80㎡である。現況は仏木集落沿いの町道と仏木川に挟まれた水田である。仏木集落から仏木川へと標高が減じるが、逆に遺構検出面では南東から北西へと標高が減じており、調査区の北西端では急な落ち込みを確認した。南に広がる標高が微高する傾向は仏木川を隔てた対岸にまで及ぶ可能性がある。土坑1基(SK1)を検出した。壁立、排水溝掘削及び遺構検出作業に伴い中世を主体とした遺物が出土している。

なお以下の説明で検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示している。

### 第2節 遺構と遺物

遺構検出面の標高は調査区北西端で21.7m、南東端で22mを計測した。調査区壁(第22図)を基に土層の説明を加える。基本層序は耕土層・盛土層(1～3・15・16層)、自然堆積層(4・5層)、旧耕土・盛土層(10・11層)、自然堆積層(6層)、腐植物層(7～9層)の大きく6層に分かれる。暗褐色灰色粘土を主体とした4・5層及び旧耕土・盛土層からは中世を主体とした土器が出土しており、これらの層を除去してから遺構検出を行った。検出したSK1以外にも調査区南東端でビット状の穴を5基、北西端で落ち込みを検出したが土層観察の結果、遺構ではないと判断した。

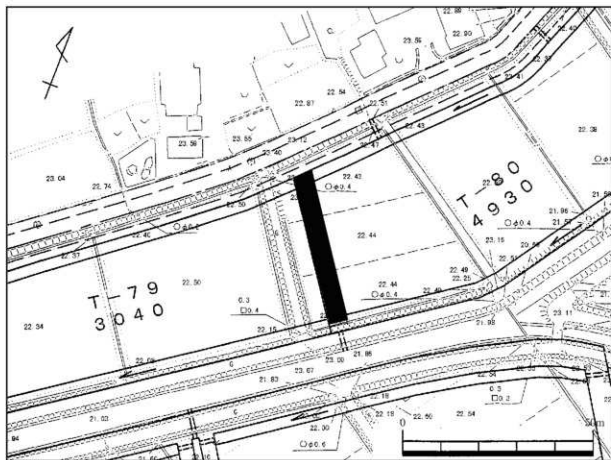
#### SK1(第22図)

調査区中央付近で検出した。平面形態は円形を呈し、検出高21.6m・径1.2m・深さ39cmを計測する。坑底は平坦で、垂直気味に立ち上がる。埋土は暗褐色灰色粘土を主体とし、1～4層の土質的な差異が不明瞭であったことから、廃絶後ごく短期間に埋まったものとする。掘削中に最下層付近でクリの皮が数点散発的に出土しており、貯蔵穴的な機能を有していた可能性が高い。調査区壁の土層観察から中・近世の耕作・盛土層よりも古いと判断できるが、遺物が出土していないことから時期の特定には至らなかった。

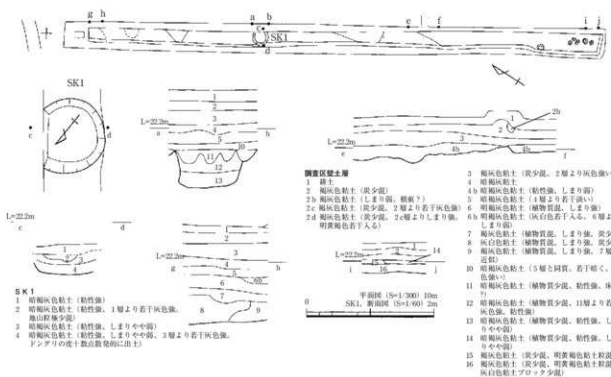
#### 出土遺物(第23図)

1は須恵器の蓋で、口縁端内側のかえりが微妙に外反している。時期は7世紀末頃と考える。2～5は土師器の皿で2・5は口径が13・15cmと大きく、3・4は口径8cmと小さい。2～4は平底の底部を有し体・底部との境が不明瞭で、2の口縁は直立気味に、3・4の口縁は短く斜め上方に伸びる。胎土は黄色味が強い。5の体部はヨコナデで微妙に外反し、口縁端を丸くおさめる。胎土は橙色が強い。2～5の時期は13世紀代と考える。6は把手で外面の一部に煤痕と被熱痕を観察できる。7は唐津の陶器皿である。高台は露胎で、その内側には円錐状の突出した削り残しがあり、畳付には窯詰の際に付着した砂粒を確認できる。時期は16世紀末～17世紀初頭と考える。

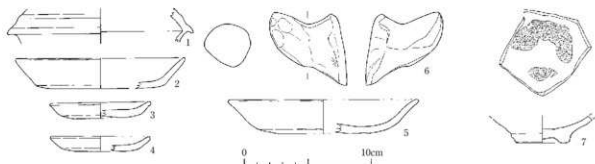
他に土師器の甕・高杯、青磁、珠洲焼の挿鉢等出土したが、細片のため図化できなかった。



第21図 調査区位置図 (S=1/1,000)



第22図 遺構実測図 (S=1/60・300)



第23図 出土遺物実測図 (S=1/3)

### 第3節 小 結

調査区北西端から町道にかけて地形が一段低くなっており、改修前の旧仏木川の流路と判断した。つまり現仏木集落の南縁沿いに旧仏木川が流れていたことになる。

貯蔵穴と思われるSK1であるが、調査区内の成果だけで時期を特定するには厳しく、そこで調査区外から時期推定の材料を集めるために現地調査と並行して周辺踏査を実施した。

まず現仏木集落が位置する丘陵南裾、町道を挟んだ調査区の反対側の畑地で土器が多く見つかった地元の方に教えてもらい訪ねたところ、その畑でまとまった量の土師器を確認した。またその畑地裏手の丘陵で町道整備に係る切土工事が行われており、そこで円筒状を呈する断面を確認し、近辺で土師器片を確認した。土師器はいずれも古代・中世というよりはむしろ弥生～古墳時代に近い印象であった。したがって丘陵上にその時期の集落の本体が存在していた可能性がある。

以上のように調査区周辺の遺構・遺物の分布状況及びそれに伴う土器の時期から判断して、SK1の所属時期が弥生～古墳時代にまで上がる可能性は低いと考える。

第5表 仏木新林遺跡遺物観察表

観測番号	実測番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	備考
1	D-44	旧耕土・包含層	蓋	須恵器	-	-	(2.7)	灰白	灰白	粗砂少含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
2	D-48	旧耕土・包含層	皿	土師器	13.4	10.2	2.4	浅黄	浅黄	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
3	D-50	旧耕土・包含層	皿	土師器	7.8	6.3	1.2	浅黄	浅黄	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
4	D-49	旧耕土・包含層	皿	土師器	7.8	6.3	1.25	浅黄	浅黄	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
5	D-45	旧耕土・包含層	皿	土師器	14.9	10.3	2.7	浅黄橙	浅黄橙	細砂含	良	ヨコナデ	ヨコナデ	海綿骨針含
6	D-43	旧耕土・包含層	把手	土師器	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫・粗砂多含	良	-	オサエ	海綿骨針含
7	D-42	旧耕土・包含層	皿	陶器	-	4.3	(2.15)	-	-	細砂含	-	施釉(透明)	施釉(透明)	唐 津

## 第6章 得田氏館跡

### 第1節 調査の概要

平成15年度は丘陵上の南縁にあたる切土箇所(第24図)を調査区とした。調査面積は445㎡である。調査区内で東西方向に実測用の杭を8mごとに打ち、東から西へ1区2区3区とグリッド番号を付した。第25図4～6区北壁土層で基本層序を説明すると耕土・盛土(1・2・23層)→遺物包含層(3・4層)→地山(黄灰色粘土)となる。褐灰色粘土を主体とした遺物包含層は全区に認められるが薄い。遺構は竪穴住居(SI)2棟・土坑(SK)3基・溝(SD)3条の他、ピット(P)を多数検出した。遺物は古墳時代のものが主体である。遺物の大半はSD1・2からの出土であった。

平成16年度は道路を挟んで北側を調査区とした。A・E区は切土箇所で各35㎡・150㎡、B・C・D・F区はパイプライン敷設箇所で各30㎡・105㎡・150㎡・140㎡で調査面積の合計は610㎡となる。基本層序は平成15年度とはほぼ同様であるが、D区南半で東西方向に較部が入っており現況では一見平坦に見える丘陵上も、過去においては思いのほか地形が複雑だったようである。遺構は竪穴住居3棟の他、土坑・溝等を多数検出した。弥生時代～中世の遺物が出土し、D・F区で目立った。

なお以下の説明で検出高は遺構検出面の標高値を、深さは検出面からの深さを示している。

### 第2節 平成15年度調査区

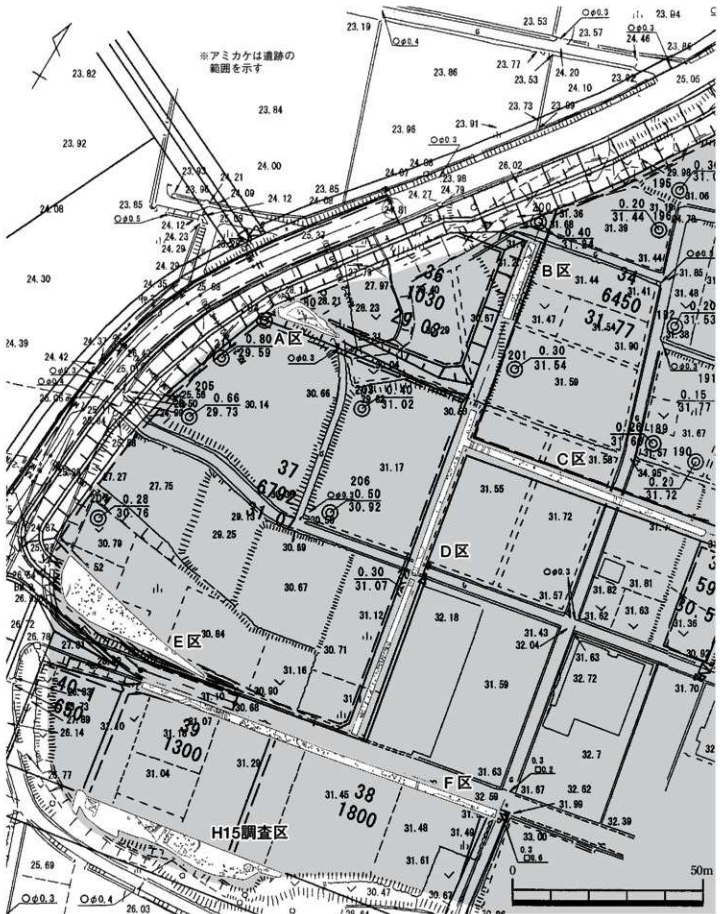
#### 1. 遺構

##### S11(第26・30図)

1・2区域で検出した。周溝の形状から円形と想定できる。検出高は30.8m、周溝幅を含めて東西3.1m・南北1.6m以上を計測する。土層は周溝(1層)・貯蔵穴(3・4層)・貼床(5・6層)・攪乱(2・7層)の各層と判断した。3・4層は壁・底面に被熱の痕跡が認められず炭化物の混入もさほど多くはなかったことから貯蔵穴の可能性が高いと判断した。貯蔵穴の坑底には若干凹凸があり、底面近くの土質はやや砂質がる。P8・10・11は埋土や掘方の形状から柱穴と思われ、P10・11は支柱穴として周溝内に構築されていた可能性がある。なおピットに隣接する( )内の数字は遺構検出面からの深さを示す。貼床から石鏃(22)の他、周溝・床面から安山岩製の剥片が22点出土した。したがって石器製作の作業場として活用されていたことが窺える。

##### S12(第25・26・30図)

5区で検出した。周溝の形状から方形と想定できる。検出高30.4m、周溝幅を含めて東西7.3m・南北3.5m以上を計測する。土層(第26図)は貯蔵穴(2～9層)・周溝(10～12層)・貼床(16・22層)・柱穴(19・20層)の各層と考える。貯蔵穴は貼床を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、検出高30.4m・長辺1.4m・短辺1m・深さ10cmを計測する。坑底中央でさらに土坑が構築されていた。平面形態はやや南東に張り出す隅丸方形を呈し、検出高30.3m・長辺1m・短辺60cm・深さ20cmを計測する。5・7層は地山ブロックを含んだ人為的な埋土と想定でき、それを含まない3・8層が間層として堆積していたことから、貯蔵穴は掘り返しを受けつつ使用されていた可能性が高い。貯蔵穴からは土師器の甕(17～19)や高杯(20)、粘土塊(21)等が出土している。



第24図 調査区位置図 (S=1/1,000)

19・20層はP23の埋土であり、P21とP25に対応して柱穴を構成すると判断した。したがって主柱穴は4本となる可能性が高い。柱穴の深さは36～45cmで、P20・24は各15・24cmとやや浅い。東側の周溝が3条確認できることから建替を2回想定でき、周溝埋土でいえば12層→11層→10層の順に新しくなる。つまり先述した貯蔵穴や柱穴はこれらの周溝に対応することになる。

#### SK1 (第27・30図)

7区で検出した。西端に位置するピット状の遺構と南に隣接する不整形の落ち込みに切られる。平面形態は不整形長方形を呈し、検出高30.1m・長辺2m・短辺95cm以上・深さ20cmを計測する。坑底は平坦に作られており、断面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰褐色粘土を基調としている。土師器腰部(23)が出土し、上面で鉄滓(24)が出土した。

#### SK2 (第27図)

3区で検出し、緩斜面に位置する。表土除去の段階で石が充填された状態で発見できた。平面形態は円形を呈し、検出高30.6m・径2.1m・深さ50cmを計測する。坑底中央が若干深く窪んでおり、北側は急角度で立ち上がっているが南側は緩やかである。埋土は黒色土を基調とし、炭粉や石を多量に含んでいる。石は平らな面を上に向けて設置されており、南側にある石の標高が若干高い。底面の埋土には灰が多く混じっていた。何らかの火焚き行為をしていたと想定できるが、何の目的に供するものであるかはわからなかった。遺物は出土していない。

#### SK3 (第27図)

6区で検出した。平面形態は楕円形を呈する。検出高30.2m・長軸95cm・短軸70cm・深さ50cmを計測する。断面が逆台形状を呈し、埋土は地山質土に近い。遺物は出土していない。

#### SD1 (第28～30図)

4・5区境で検出し、緩斜面に位置する。SD2とP3を切る。検出高30.6m・幅2m・深さ15～20cmを計測する。溝底が北から南へと傾斜しており、その標高は北端で30.5m、南端で30.2mを計測する。南半から幅が急に広がって深さも減じ、東西端の最大幅が3.2mを越えるあたりで溝上端は消失する。埋土は暗灰褐色粘土を基調とし、土層断面図では1・2層及び3層の一部に対応する。土師器の甕(26)・高杯(27)・碗(28)・有台碗(30)、須恵器の無台杯(29)の他、台石(16)・鉄滓(31)・羽口(32)等が出土した。

#### SD2 (第28・29図)

4～5区境で検出し、緩斜面に位置する。SD2とP3に切られる。検出高30.5m・幅40cm・深さ25cmを計測する。溝底はSD1と同様に傾斜し、その標高は北端で30.3m、南端で30mを計測する。SD1と異なり南端が窄まるが消失はしていない。埋土は褐灰色粘土を基調とし、土層断面図では3層に対応する。土師器の甕(1～4)・壺(5～9)・高杯等(10～15)の他、多量の土器が出土した。

#### SD3 (第28図)

3・4区境で検出した。中央から南端にかけて2基のピットに切られる。平面形態は緩い「く」の字状を呈し、検出高30.8m・幅20cm・深さ10～15cmを計測する。溝底が北から南へと傾斜しており、その標高は北端で30.7m、南端で30.5mを計測する。埋土は暗灰褐色粘土を基調とする。遺物は出土していない。西側にあるP13～16・19は柱穴状の掘方・埋土を呈しており、遺構の配置状況から判断してもSD3は壑穴周溝となる可能性が高く、その場合SD3に付く主柱穴はP13・14・16に相当す

ると考える。深さは26~40cmであった。

## 2. 遺物

### SD2出土遺物(第29図)

1~4は土師器の甕である。1の口縁は緩やかに外反し端部が若干細りとなる。頸部は鋭く屈曲し体部が球胴形を呈し、底部は丸底である。体部外面にスガが付着するが、底部は赤色化しており二次的被熱痕と判断した。頸部・胴部中位上の内面に接合痕が2箇所認められるが、頸部以下の内外面に施された密なハケ調整により他の接合痕は概ね消失している。頸部以下のハケは乱雑に見えるが、外面は縦・斜方向で内面が横・斜方向を基調としているようで、口縁以上はヨコナデである。2の形状・調整も1とはほぼ同様と考えるが、体部は長胴気味で底部の器壁が若干厚い。ハケ原体の幅は8mmで1と変わらないが、2の方が粗っぽく仕上げられている。3は器壁の垂みが目立つ。4は口縁の垂みのため体部を直立気味に円化しており、実際の口径は減少する。5~9は小型の壺である。5~7は丸底で、8は平底である。5の器壁は厚く6が薄く、7は内面の接合痕が明瞭に残存し、8の口径は体部径をやや上回っている。外面の色調は5が橙色で6・7は黄灰色、8が褐灰色を呈する。

10~15は高杯脚部である。おおむね脚部が強く屈曲外反している。脚部内面に施されたナデは雑で接合痕が明瞭に残存する場合が多い。10は下方向へ徐々に幅厚となり、脚部端部は丸みをもつ。内面の接合痕は1ないし2cm間隔で残存し、脚部端部から杯部まで計5段の輪積みを確認した。11の脚部端部は10と比べて内湾気味で若干細りとなる。内面の接合痕は1~1.5cm間隔で残存し、脚部端部から杯部まで計6段の輪積みを確認したが、接合痕の間隔が4mmの箇所もある。12は脚部端部の屈曲外反位置が低めで、脚部端部にかけて器壁が薄くなる。他の高杯よりも作りが雑で脚部の影らみも目立ち、やや新手の様相を呈する。13は杯部との接合部分が厚く脚部で器壁を減じる。14は小振りで作りが丁寧に見受けられた。器壁が薄く脚部端部の外反も緩い。15は脚部中央の影らみが目立たず比較的スマートな形状を呈する。14・15は外面にミガキ痕をきょうじて留めている。16は安山岩製の台石である。

出土遺物から判断してSD2の時期は古墳時代中期に比定できる。

### SD2以外の出土遺物(第30図)

17~21はSI2のP4、貯蔵穴から出土した。17~19は土師器の甕である。17・18の口縁は「く」の字状を呈し頸部のくびれが強い。17の口縁端部は面取りされ、18はつまみ上げのせいか先細りとなっている。19の体部は長胴形を呈し器壁が口縁端まで均一で、内外面に斜方向のハケが施される。体部内面の接合痕は1.8cm間隔で残存している。20は土師器の高杯である。杯部中位で器壁を減じ、口縁端部が斜め上方に伸びる。21は焼き歪んだ粘土塊である。17~21の時期は古墳時代中期と考える。

22は安山岩製の石鏃でSI1内のP7から出土した。23・24はSK1から出土した。23は甕の体部と考える。球胴形を呈し底部は丸底である。24は鍛冶滓である。上下の判断がつかず、実測図は正位を示していない可能性がある。SK1の上面で出土しており混入したものと思われる。

25~32はSD1から出土した。25は鉄石英の剥片で、26は土師器の甕である。口縁部下端をやや突出させており山陰系と考える。27は土師器の高杯である。脚部端部は欠損し、屈曲外反する可能性がある。28は土師器の椀である。口縁は内湾気味で端部を丸くおさめ、円柱状の厚い底部をもつ。29は須恵器の無台杯で、器壁は薄く仕上げられ口縁の開きは緩い。30は土師器の有台椀で、高台は外反して接地する。31は椀形滓で、近くで鍛冶を行っていた状況が窺える。32はガラス化が顕著で溶解炉片の



可能性がある。出土遺物から判断してS D 1の時期は10～11世紀代に比定できる。

33～40は遺構外出土遺物である。33・34は弥生土器の甕と考える。33は口縁に段をもち、34は平底を呈する。35は土師器の高杯で脚部は「ハ」の字状に開く。36は土師器のミニチュア土器でコップ状を呈する。37は須恵器の双耳瓶、38が土師器の把手である。39は泥岩質の砥石で淡黄色を呈し、上面右寄りに磨減りが目立つ。40は杭で下部に面取りが施されている。

### 第3節 平成16年度調査区

#### 1. 遺 構

##### A・C区 (第31・32図)

**A区 (第31図)** 遺構検出面の標高は29.2mを計測する。田面造成時の盛土が1m近くあり、遺物包含層は確認できなかった。溝1条とピット3基を検出したが、遺物は出土していない。溝は幅40～60cm・深さ20cm、ピットが長軸40cm～1m・深さ20～40cmを計測する。田面造成前の生産域と想定でき、溝はそのための排水的な役割を果たしていた可能性がある。

**C区 (第32図)** 遺構検出面の標高は東端で30.7m、西端が31.3mを計測し、農道を挟んで一段東へ低くなる。溝・ピットを検出したが砂質気味のしまらない灰色の埋土が多く、田面造成前の耕作痕跡、稲架穴ないし木の根による攪乱穴と判断した。削平の度合いが他の調査区よりも顕著で遺構も浅い。

##### B区 (第31・42図)

**S I 1 (第31・42図)** B区北端で検出した。平面形態は方形を呈し、検出高30.9m・1辺2.5m以上・深さ10cmを計測する。土層は遺構埋土(4層)・壁溝(6・7層)・貼床(8層)の各層に分かれる。3層は遺物包含層で、4層が埋没したときに伴う自然崩落土を5層と判断した。東隅でピットを2基検出し、柱穴状の掘方形状・埋土を呈する。また遺構の配置状況からP1がS I 1に対応する柱穴と考えられる。したがって主柱穴は4本となる可能性が高い。P1に隣接するピットも柱穴と考えられることから建替えを想定できるが、切合いの記録が残っておらず前後関係は不明である。ただ西壁土層を観察すると、S I 1が別の遺構を切っている状況を窺えないことから、S I 1は後出する可能性がある。弥生土器の甕(50)の他、土師器細片が出土した。

**S K 1 (第31図)** B区中央で検出した。平面形態は円形を呈し、検出高30.8m・径1.1m・深さ90cmを計測する。坑底の平面形態は長方形を呈し、長辺65cm・短辺45cmを計測する。坑底に湧水が認められ、貯蔵穴の可能性もある。4・5層が自然堆積して3層を掘り返した後、1・2層が埋没したものと判断した。しかし3層が壁面の崩落土である可能性もある。遺物は出土していない。

**S K 2 (第31図)** B区中央南寄り検出した。平面形態は隅丸方形を呈し、検出高30.6m・1辺1m・深さ1.5mを計測する。坑底の平面形態は方形を呈し、1辺60cmを計測する。坑底に湧水が認められ、貯蔵穴の可能性もある。遺物は出土していない。

##### D区 (第33～35、42・43図)

**S I 1 (第34・43図)** D区中央北寄り検出した。平面形態は隅丸方形を呈し、検出高30.8m・南北3m・東西1m以上・深さ20cmを計測する。断面図c-d間を基に説明すると土層は壁溝(4・5層)・貼床(6層)・地下土坑(7～14層)・柱穴(15・16層)の各層と判断した。地下土坑構築

後に床を貼り、その上から柱穴が1基掘り込まれている。地下土坑の平面形態は歪んだ長方形を呈し、検出高30.6m・長辺1.6m以上・短辺70cm・深さ20~30cmを計測する。坑底に凹凸が目立ち、作りは雑で、埋土には地山質土を多く含む。防湿を意図した地下構造としての機能が想定できる。柱穴の底面は丸みを有し、埋土には地山質土を多く含む。配置状況から主柱穴を構成する可能性は高いが、何本の柱穴で構成されていたかを捉えることはできなかった。須恵器の甕(70)が出土した。

ピット(第33~35、42・43図) D区中央南寄りから南端にかけてピットを多数検出した。調査区幅が狭小なため柱筋を捉えにくく建物復元には至っていない。埋土は(濁)暗灰褐色粘土を基調とする。P3・10で須恵器の無台杯(68・67)、P6・12で土師器の有台碗(64・63)が出土した。

鞍部(第34・42・43図) D区中央の南寄りで検出した。D区を東西に横断する。西の延長線上に窪地があり、そこにつながる可能性がある。検出高30.6m・幅16m・深さ30~40cmを計測する。東壁土層を基に説明すると層位は大きく3層に分かれ、新層(8・9・13層)・古層(10・14層)・最古層(11層)と便宜的に呼称する。最古層→古層→新層の順に堆積しており、最古層は地山質土と土質的に近似する。流路は西と考える。埋土の混入物や肩部の立ち上がりから新層は溝状遺構の可能性が高い。須恵器の甕(71)が出土し、下層からは製塩土器(57)や須恵器の無台杯(66)が出土している。

#### E区(第36~38・41・42図)

多数のピットを検出したが、砂質気味のしまらない灰色の埋土が多く、稲架穴もしくは木の根による攪乱穴が大半と判断した。規格性のある配置状況を示すピット列に関しては、念のためにエレベーションを作成し第41図に掲載した。出土遺物も少量である。

SK1(第37図) E区中央北西寄りで検出した。P13に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、検出高31.6m・1辺65cm・深さ82cmを計測する。坑底の平面形態も同様で1辺55cmを計測する。平坦に作られており湧水は認められなかった。遺物は確認できなかったがP13で出土している。なお断面図の2・3層はP13の埋土である。

SD1(第36図) E区南西端で検出した。北端は攪乱で切られる。検出高31m・幅35cm・深さ8cmを計測する。溝底が南から北へと傾斜していることから流路は北と考える。

ピット(第37・38・42図) P5・6はE区東側で検出した。P5の平面形態は隅丸方形を呈し、検出高31.7m・1辺25cm・深さ6cmを計測する。土師器の高杯(55)が出土した。P6の平面形態は隅丸方形を呈し、検出高31.6m・1辺65cm・深さ38cmを計測する。弥生土器の甕(43)が出土した。P13はE区中央北西寄りで検出した。SK1を切る。平面形態は円形を呈し、検出高31.6m・径30cm・深さ50cmを計測する。弥生土器の甕(44)が出土した。

#### F区(第39~42図)

SI1(第39・42図) F区西端で検出した。SD2は壁溝に相当すると考える。壁溝は弧状を呈しつつF区外南側に伸びるが平面形態は判然としない。柱穴も確認できなかった。壁溝は検出高31.1m・幅40cm・深さ18cmを計測する。土層は遺構埋土(1・2層)・壁溝(3・4層)・貼床(5層)と判断した。貼床から弥生土器の甕(41・42・45・49)・壺(52)、土師器の脚部(62)が出土し、壁溝から弥生土器の甕(46・48・53)・高杯(54)が出土している。

SD1(第39・42図) F区西端で検出した。検出高31.2m・幅40cm・深さ30cmを計測する。溝底は北から南へと傾斜することから流路は南と考える。弥生土器の高杯(56)が出土した。

SD 3 (第39・42図) 西区西半で検出した。P 6を切る。検出高31.3m・幅45cm・深さ48cmを計測する。溝底は北から南へ傾斜することから流路は南と考える。弥生土器の甕(51)が出土した。

SD 4 (第39図) F区中央西寄りで検出した。検出時は溝状の遺構と考えていたが、地山質土の下に淡褐色土が入り込んでいることから風倒木と判断した。2～4層は別の溝状遺構で、SD 4を切る。

SD 6 (第40・41図) F区東半で検出した。検出高31.3m・幅50cm・深さ34cmを計測する。溝底は北から南へ傾斜することから流路は南と考える。溝底は平坦で断面が逆台形状を呈する。D区南端とF区西端における遺構のまとまりから判断して、区画溝としての機能を想定できる。

ピット(第39・40・42図) F区西半でピットを多数検出した。調査区幅が狭小なため建物復元には至っていない。埋土は(溝)暗灰褐色粘土ないし褐灰色粘土を基調とする。P 1で製塩土器(61)が出土した。

## 2. 遺 物

実測図は第42・43図に掲載し、報告番号は平成15年度調査からの連番で器種ごとに付した。

41～51は弥生土器の甕である。41の口縁は外反し端部が面取りされ、頸部のくびれは弱く体部径は口径よりもやや小さい。器壁はほぼ均一であるが平底の底部へ至って急に厚みを増す。底部内面には穿孔に伴う器壁の膨らみを観察できないことから焼成後に穿孔されたと考える。外面は縦方向後に斜方向でハケが施され、内面はハケ後にナデが入る。肩部外面には別の工具によるハケが一周巡り、後述する他の甕よりやや古手の様相を呈する。42は「く」の字状の口縁を呈し、端部はつまみ上げのせいか若干内側に引き出される。43は口縁に段をもち、頸部内面を除いて黒色化している。44は口縁の重みのためか直立気味に図化しており、実際の口径は減少する。45・46は平底で厚みがある。45は円柱状を呈し、中位がヨコナデにより凹みが生じている。46は上方に器形の広がり認められ、壺になる可能性がある。47・49・51は口縁に段をもち、端部の傾きは順に内傾・直立・外傾となる。口縁帯には擬凹線が施される。49の口縁端部はフラットな仕上げであり、頸部が鋭く屈曲して内面には稜が生じ、頸部外面にハケが施される。50の口縁は「く」の字状を呈する。52は弥生土器の鉢である。口縁に段をもち端部はわずかに外反する。口縁帯には擬凹線が施され、径を減しながら下へと続く。53は弥生土器の甕である。口縁の重みのためか直立気味に図化しており、実際の口径は減少する。41～53は弥生時代後期～古墳時代前期に比定できる。

54～57は弥生土器の高杯である。54は棒状を呈し脚部で屈曲する。55は薄手で脚部は「ハ」の字状に開き、脚部は微妙に外反する。56は杯部で立ち上がり外反し、口縁端部を丸くおさめる。脚部との接着部分付近で器壁の厚みを減じているが、これは磨耗によるものである。57は脚部の開きが緩やかで内外面に赤彩が施される。54～57の時期は弥生時代後期～古墳時代前期に比定できる。58・59は土師器の把手である。体部との接着部分が両端とも黒色化している。60・61は製塩土器と考える。60は器形と下部の破損状況から判断して棒状の尖底部分が付く可能性が高い。内面にシボリメが顕著に残り、被熱で器壁がボロボロである。なお実測図のアミカケは欠損部を示す。61は脚部で内外面に接合痕が残存し器壁が薄い。脚部は折り曲げて斜め上方に外反させ、接地部分は局所的に粘土で継ぎ足しているように見受けられた。62は高杯ないし器台である。穿孔が1箇所認められ孔径5mmは計測する。63・64は土師器の有台甕である。63は体部と高台の接着部分が残存し胎土のキメはやや細かい。64の口縁は内湾気味で端部が微妙に肥厚する。磨耗顕著だが体部下半のロク口痕は明瞭に観察で

きる。平底の底部は厚みがあり底外面は窪んでおり、高台が剥がれ落ちている。内黒の可能性もあるが判然としない。63・64は10～11世紀代に比定できる。65は蛇紋岩製磨製石斧で欠損部がなく、使用痕も少ない。

66～68は須恵器の無台杯である。66は焼成が甘く土師質である。67はやや薄手で体・底部の屈曲が66・68より強い。68の体部中央はナデで若干窪み、口縁端部は尖り気味に成形されている。69は須恵器の有台杯で高台は方形を呈する。70・71は須恵器の甕である。70は器壁が薄く内外面の調整はタタキであり、内面にはナデによる磨り消し痕が観察できる。時期は古墳時代中期頃に比定できる。71は直立気味に図化しており実際にはやや外傾気味と考える。72は珠洲焼の鉢で、体部内面に直線文をかけあわせたような卸目を有する。時期は12～13世紀代に比定できる。73は越前焼の鉢である。内面に幅3cmで11条の卸目が施される。74は珠洲焼の甕で口縁端部が肥厚しつつ外反する。75は珠洲焼の鉢で、口縁端内側に波状文が施される。73～75の時期は15～16世紀代に比定できる。

#### 第4節 小 結

最後に大まかな遺構分布を確認しておく。

平成15年度調査（以下、H15）では、弥生時代後期～古墳時代前期（S I 1）と古墳時代中期（S I 2）の竪穴住居、古墳時代中期の溝（S D 2）、古代後半の溝（S D 1）などを検出した。

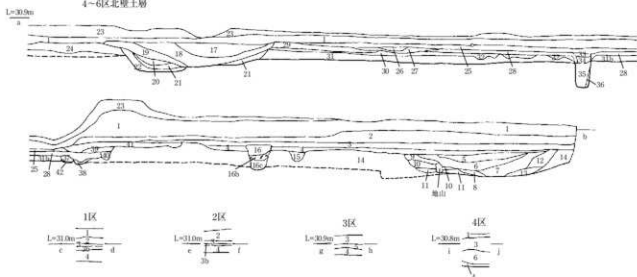
平成16年度調査（以下、H16）では、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居（B・F区）・土坑（B・E区）・溝（F区）、古墳時代中期（D区）の竪穴住居、古代後半の柱穴（D区）などを検出した。

以上の結果から時期別に遺構分布をまとめると、

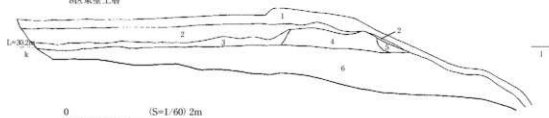
- ① 弥生時代後期～古墳時代前期（H15区、H16B・E・F区）
- ② 古墳時代中期（H15区、H16D区）
- ③ 古代後半（H15区、H16D区）

となる。調査区周辺には集落跡が弥生時代から存在しており、丘陵上に位置する当地の居住適性の高さが窺える。中世の遺跡として知られる得田氏館跡であるが、中世の遺物が出土しているにもかかわらず、館跡とのつながりを窺わせる遺構は検出できなかった。調査区周辺は得田氏の馬場跡だったとの伝承がある、と先述の平野由郎氏に教示頂いた。今回の調査成果から判断して、中世の居住域は現徳田集落と重なる位置に存在していた可能性が高い。

4-6区北壁土層



8区東壁土層



4-6区北壁土層

- 1 灰褐色粘土 (礫土)
- 2 灰褐色粘土 (1層より深い、礫土)
- 3 褐色粘土 (灰少泥)
- 4 褐色粘土 (灰少泥、灰白粘土ブロック少泥)
- 5 暗灰褐色粘土 (灰白粘土ブロック少泥、灰少泥)
- 6 暗灰褐色粘土 (灰白粘土ブロック少泥)
- 7 暗灰褐色粘土 (地山ブロック泥、灰少泥、下部に灰色少しある)
- 8 暗灰褐色粘土 (地山多泥)
- 9 暗灰褐色粘土 (黄褐色粘土ブロック泥、灰少泥)
- 10 暗灰褐色粘土 (灰白粘土ブロック少泥)
- 11 暗灰褐色粘土 (地山多泥)
- 12 黄褐色粘土 (暗灰褐色粘土)
- 13 黄褐色粘土 (地山多泥、暗灰褐色粘土ブロック少泥)
- 14 黄褐色粘土 (暗灰褐色粘土、12層よりしりぞき、地山に近い)
- 15 褐色粘土 (灰少泥、灰白粘土ブロック少泥)
- 16 褐色粘土 (灰泥)
- 16a 褐色粘土 (土砂、灰泥)
- 16c 褐色粘土 (灰泥、地山少泥)
- 17 灰褐色粘土 (しりぞき、粘性弱、礫少泥)
- 18 暗灰褐色粘土 (地山ブロック少泥、灰少泥)
- 19 褐色粘土 (灰少泥)
- 20 褐色粘土 (19層より深い、黄褐色粘土ブロック少泥)

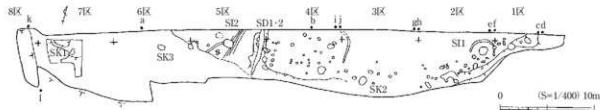
- 21 褐色粘土 (地山ブロック多泥)
- 22 褐色粘土 (地山ブロック泥、灰少泥、下部に礫少泥)
- 23 礫土
- 24 黄褐色粘土 (褐色粘土ブロック少泥、地山に近い)
- 25 暗灰褐色粘土 (灰泥、灰白粘土泥)
- 26 褐色粘土 (25層に近似、黄褐色粘土少泥)
- 27 褐色粘土 (25層に近似、灰白粘土ブロック少泥)
- 28 褐色粘土 (灰泥、地山泥)
- 29 褐色粘土 (灰泥、地山多泥)
- 30 淡灰色細砂 (粘性強、灰泥、褐色粘土少泥)
- 31 淡灰色細砂 (粘性強、礫泥、褐色粘土少泥)
- 31b (31層+褐色粘土多泥)
- 32 褐色粘土 (地山、灰少泥)
- 33 褐色粘土 (灰・土砂泥)
- 34 褐色粘土 (33層より深い、地山程度、灰泥)
- 35 褐色粘土 (33層より深い、地山ブロック・黄泥)
- 36 褐色粘土 (34・35層より細く、しまっている)
- 37 褐色粘土 (灰・地山ブロック泥)
- 38 褐色粘土 (地山程度)
- 39 褐色粘土 (地山少泥)
- 40 褐色粘土 (灰・地山泥)
- 41 褐色粘土 (地山程度)
- 42 淡灰色粘土 (褐色粘土少泥)

1区-4区北壁土層

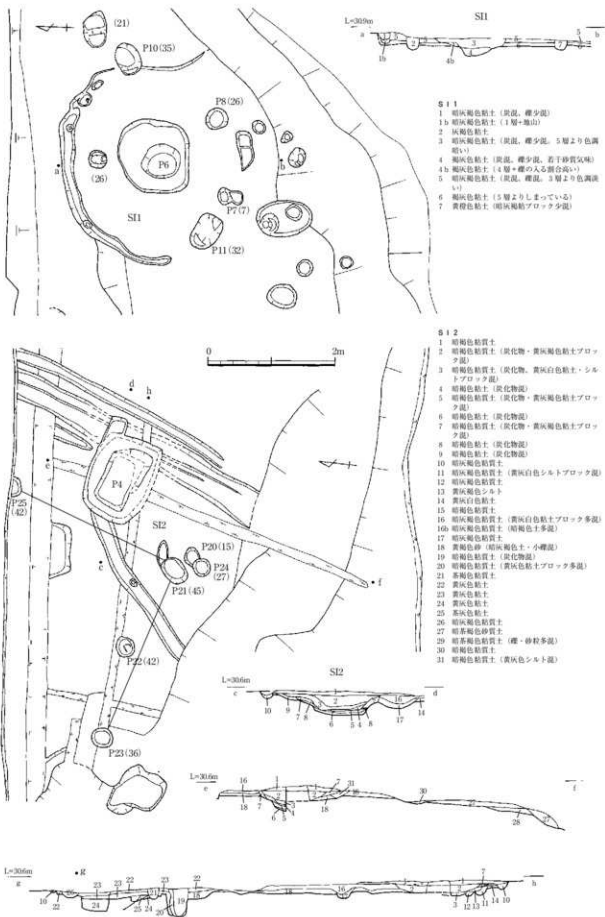
- 1 礫土
- 2 灰褐色粘土 (礫土)
- 3 褐色粘土 (灰少泥)
- 1a 褐色粘土 (若干層の砂は同質)
- 4 黄褐色粘土 (地山)
- 5 暗灰褐色粘土 (S11層土)
- 6 暗灰褐色粘土 (灰泥)

8区東壁土層

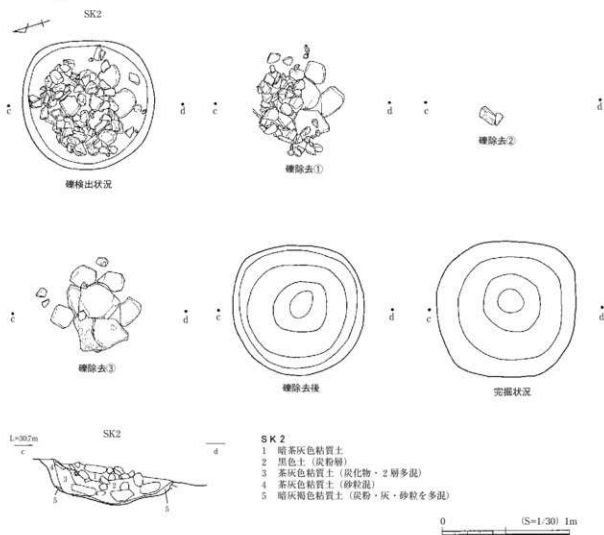
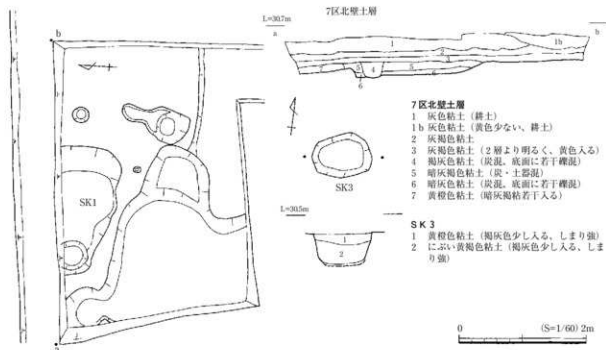
- 1 礫土
- 2 灰色粘土
- 3 灰褐色粘土
- 4 オリーブ褐色粘土 (粘性弱)
- 5 オリーブ褐色粘土 (黄色入る)
- 6 灰褐色粘土



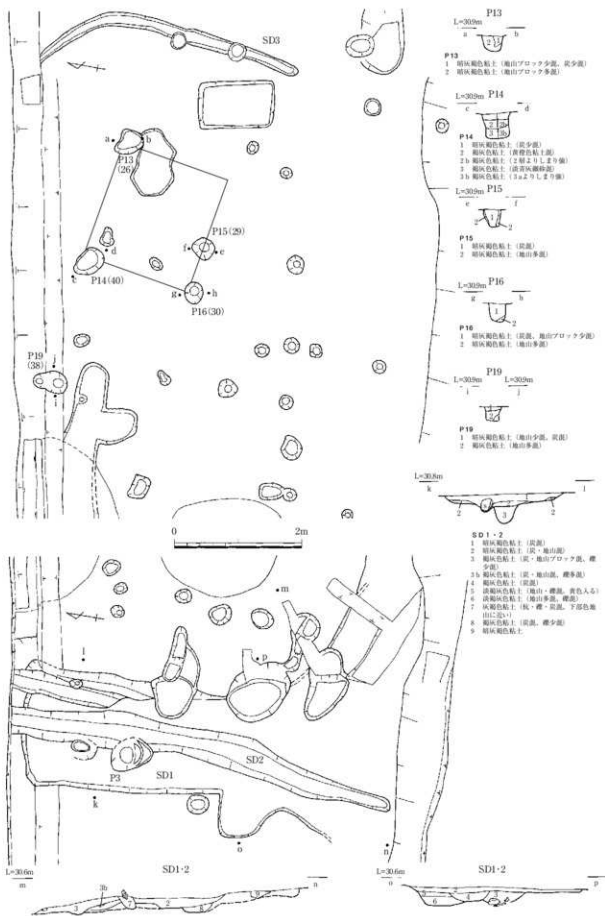
第25図 調査区土層図・全体図 (S=1/60・400)



第26図 竪穴住居実測図 (S=1/60)

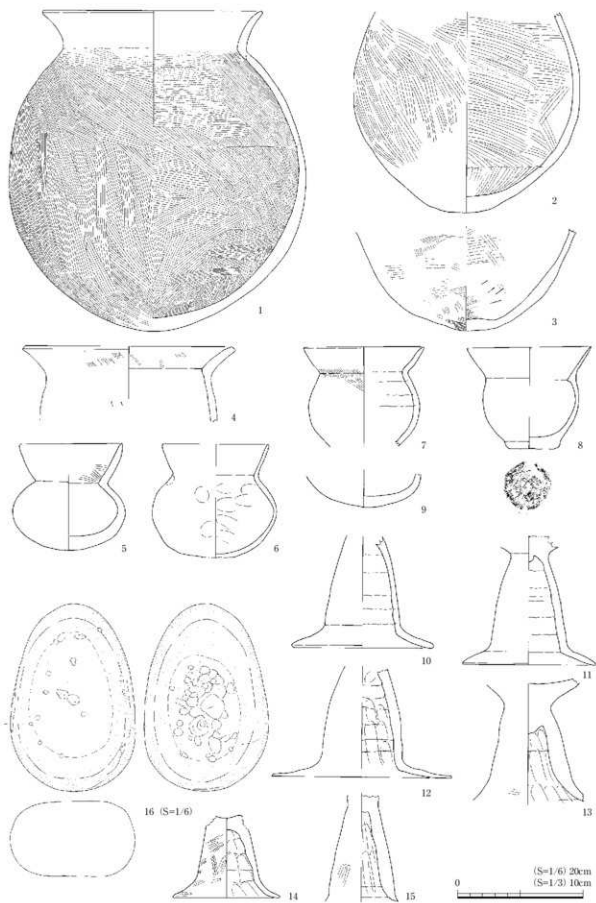


第27図 土坑実測図 (S=1/30・60)

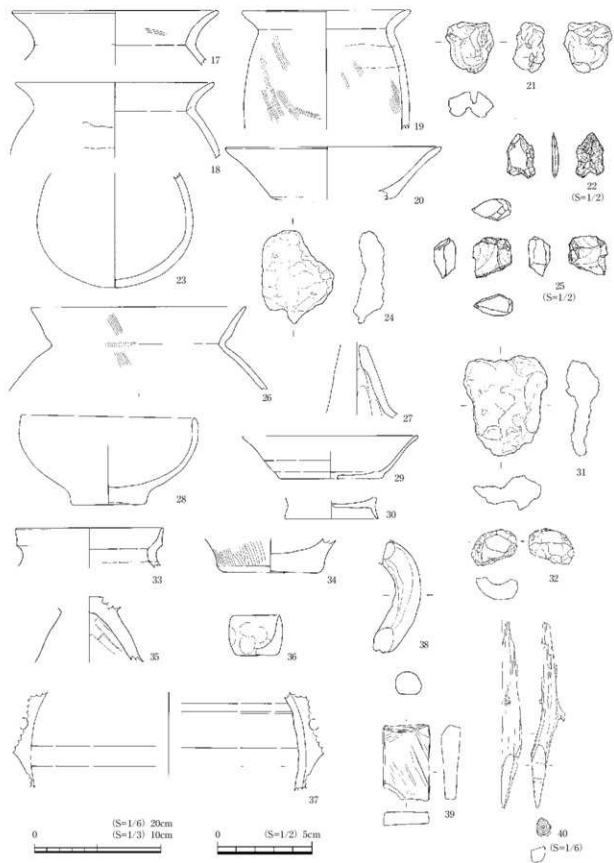


第28図 ビット・溝実測図 (S=1/60)

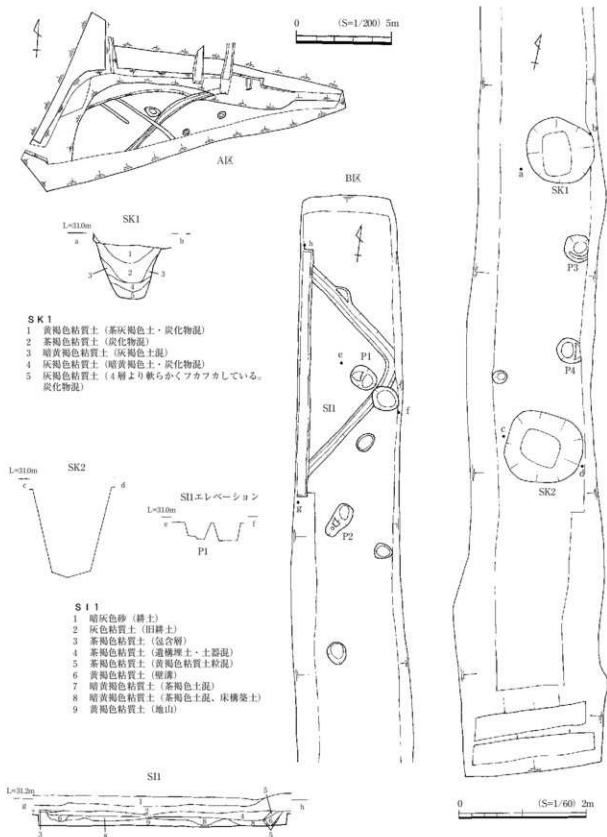




第29图 SD2出土遗物实测图 (S=1/3·6)



第30図 出土遺物実測図 (S=1/2・3・6)



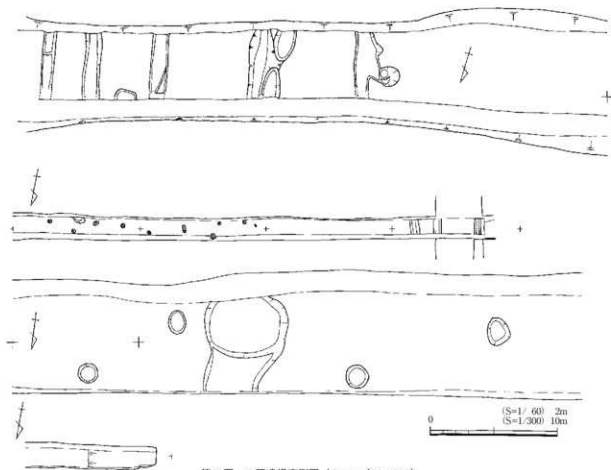
**SK1**

- 1 黄褐色粘質土 (赤灰褐色土・炭化物混)
- 2 茶褐色粘質土 (炭化物混)
- 3 暗黄褐色粘質土 (灰褐色土混)
- 4 灰褐色粘質土 (暗黄褐色土・炭化物混)
- 5 灰褐色粘質土 (4層より軟らかくフカフカしている。炭化物混)

**S11**

- 1 暗灰色砂 (礫土)
- 2 灰色粘質土 (旧礫土)
- 3 茶褐色粘質土 (包含層)
- 4 茶褐色粘質土 (遺構埋土・土器混)
- 5 茶褐色粘質土 (黄褐色粘質土粘混)
- 6 黄褐色粘質土 (壁溝)
- 7 暗黄褐色粘質土 (茶褐色土混)
- 8 暗黄褐色粘質土 (茶褐色土混、床構築土)
- 9 黄褐色粘質土 (地山)

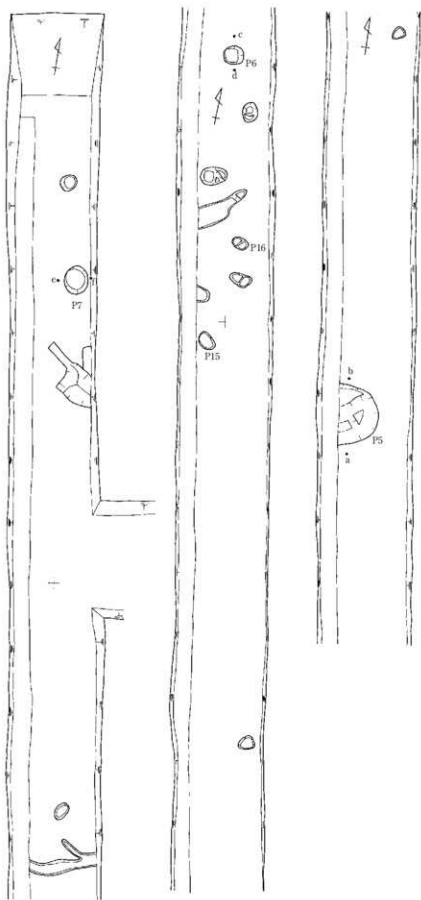
第31図 A・B区遺構実測図 (S=1/60・200)



第32図 C区遺構実測図 (S=1/60・300)

第6表 得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表①

報告番号	実測番号	出土地点	器種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	備考	
1	C-85	5区SD1	罍	土師器	17.3	-	25.6	灰黄 黄灰	灰黄 黄灰	糠・糠砂多含	良	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ハケ	海砂質多含む
2	C-84	5区SD2敷上3	罍	土師器	-	2.8	116.0	にぶい黄體	灰黄	糠砂・糠砂多含	良	ハケ	ハケ ナデ	海砂質多含む
3	C-78	5区SD2敷上12	罍	土師器	-	-	66.9	にぶい黄體	にぶい體 にぶい黄體	糠砂多含	差	ハケ ケヌリ	ハケ	海砂質多含む
4	C-66	5区SD2敷上4	罍	土師器	17.3	-	(5.7)	灰黄體	にぶい黄體	糠砂・糠砂多含	差	ナデ ハケ 削削瓦	ハケ ナデ 削削瓦	海砂質多含む
5	C-61	5区SD2敷上15 溝水溝	小壺	土師器	8.2	1.5	8.5	黄灰	體	糠砂・糠砂多含	良	ハケメ	磨瓦	海砂質, 赤色 多含む
6	C-83	5区SD2敷上7	小壺	土師器	8.4	2.3	9.0	にぶい黄體	にぶい黄體	糠砂多含	差	ヨコナデ ナデ 削削瓦	ヨコナデ ナデ 削削瓦	海砂質多含む
7	C-67	5区SD2溝水溝	小壺	土師器	9.6	-	(7.9)	灰黄	灰黄	糠砂多含	良	ナデ	ナデ ハケメ	海砂質, 硝灰 多含む
8	C-62	5区SD2中央7 敷上12	小壺	土師器	9.9	4.1	8.2	にぶい體	にぶい體	糠・糠砂・糠砂 多含	差	磨瓦	磨瓦	海砂質, 赤色 多含む
9	C-82	5区SD2敷上1	小壺	土師器	-	-	(2.7)	にぶい黄體	にぶい黄體 灰黄	糠砂多含	差	ナデ	ナデ	海砂質多含む
10	C-63	5区SD2 溝水溝	高杯	土師器	-	11.4	(8.9)	體	體	糠砂多含	差	磨瓦	磨瓦	海砂質, 赤色 多含む
11	C-77	5区SD2 溝水溝	高杯	土師器	-	10.7	(10.2)	にぶい體	浅黄體	糠砂多含	差	ナデ	ナデ	海砂質, 赤色 多含む
12	C-58	5区SD2敷上3	高杯	土師器	-	14.3	(8.9)	にぶい體	にぶい體	糠砂多含	差	削削瓦 ナデ	ヨコナデ	海砂質多含む
13	C-57	5区SD2敷上6	高杯	土師器	-	-	(9.7)	にぶい體	體	糠砂多含	差	削削瓦	ミダキ	
14	C-50	5区SD2中央7 敷上11	高杯	土師器	-	8.4	(6.9)	にぶい黄體 灰黄	にぶい體	糠砂多含	差	ヨコナデ ナデ 削削瓦	ナデ ヨコナデ 削削瓦	海砂質多含む
15	C-60	5区SD2敷上10	高杯	土師器	-	-	(8.0)	にぶい赤體	體	糠砂・糠砂多含	差	削削瓦 シタリメ	ミダキ	
17	C-69	5区S1内P4	罍	土師器	16.2	-	14.3	體	體	糠砂多含	差	ハケ	磨瓦	



- P5
- 1 暗灰色粘土 (地山多混、しまり弱)
  - 2 暗灰色粘土 (暗灰色粘土少混)
  - 3 黄褐色粘土 (暗灰色粘土少混)
  - 4 暗灰色粘土 (地山混)



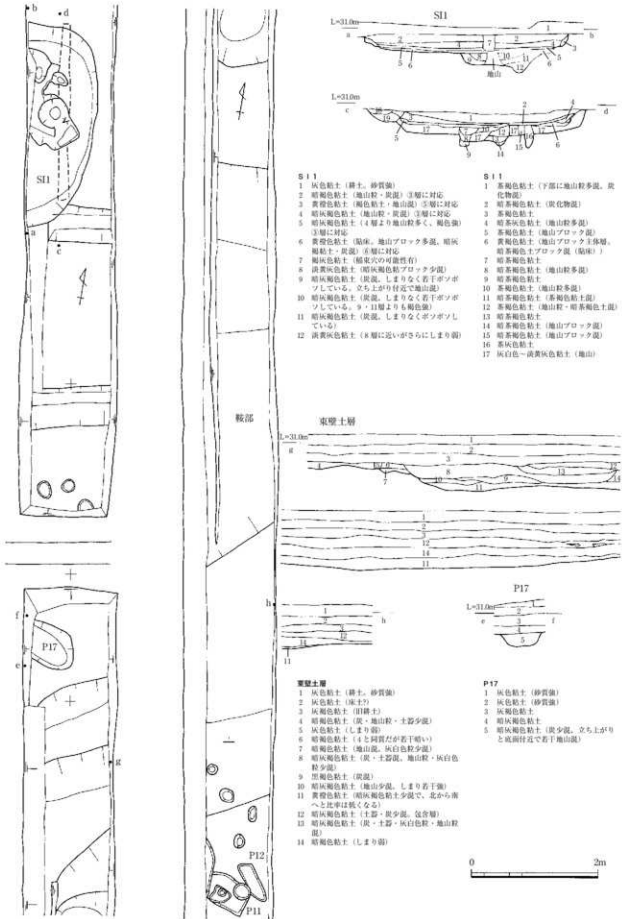
- P6
- 1 暗灰色粘土 (若干泥味有、土器混、灰・地山較少混)
  - 2 黄褐色粘土 (暗灰色粘土少混)



- P7
- 1 暗褐色粘土 (地山ブロック少混)
  - 2 暗灰色粘土 (粘性強、しまり弱くゼツボアしている)
  - 3 暗灰色粘土 (2層・地山ブロック混)



第33図 D区遺構実測図① (S=1/60)



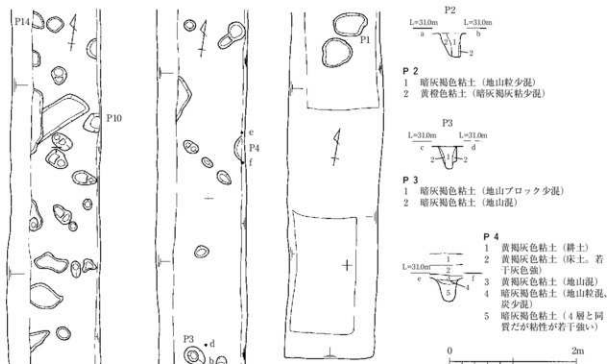
- SI1**
- 1 灰色粘土 (層土、砂質強)
  - 2 暗褐色粘土 (地山粒・炭泥) ③層に対応
  - 3 黄褐色粘土 (褐色粘土・地山粒) ⑤層に対応
  - 4 暗灰褐色粘土 (地山粒・炭泥) ③層に対応
  - 5 暗灰褐色粘土 (4層より地山粒多く、褐色強) ③層に対応
  - 6 黄褐色粘土 (暗赤・地山ブロック多量、暗灰褐色粘土・炭泥) ⑤層に対応
  - 7 暗灰褐色粘土 (堀込穴の可能性有)
  - 8 黄褐色粘土 (暗灰褐色粘土ブロック少量)
  - 9 暗灰褐色粘土 (炭泥、しまりなく若干ゴツゴツしている。立ち上がり付近で地山混)
  - 10 暗灰褐色粘土 (炭泥、しまりなく若干ゴツゴツしている。9・11層より褐色強)
  - 11 暗灰褐色粘土 (炭泥、しまりなくゴツゴツしている)
  - 12 黄褐色粘土 (⑤層に近い砂さらししまり弱)

- SI1**
- 1 黄褐色粘土 (下部に地山粒多量、炭化物混)
  - 2 暗褐色粘土 (炭化物混)
  - 3 黄褐色粘土
  - 4 暗褐色粘土 (地山粒多量)
  - 5 黄褐色粘土 (地山ブロック混)
  - 6 黄褐色粘土 (地山ブロック土体層、暗褐色粘土ブロック混 (堀込穴))
  - 7 暗褐色粘土
  - 8 暗褐色粘土 (地山粒多量)
  - 9 暗褐色粘土
  - 10 黄褐色粘土 (地山粒多量)
  - 11 暗褐色粘土 (黄褐色粘土混)
  - 12 暗褐色粘土 (地山粒・暗褐色粘土混)
  - 13 暗褐色粘土
  - 14 暗褐色粘土 (地山ブロック混)
  - 15 暗褐色粘土 (地山ブロック混)
  - 16 黄褐色粘土
  - 17 灰白色・黄褐色粘土 (地山)

- 東壁土層**
- 1 灰色粘土 (層土、砂質強)
  - 2 灰色粘土 (床土)
  - 3 灰褐色粘土 (暗赤土)
  - 4 暗褐色粘土 (炭・地山粒・土砂少量)
  - 5 灰色粘土 (しまり弱)
  - 6 暗褐色粘土 (4層程度だが若干暗い)
  - 7 暗褐色粘土 (地山混、灰白色粒少量)
  - 8 暗灰褐色粘土 (炭・土砂混、地山粒・灰白色粒少量)
  - 9 黄褐色粘土 (炭泥)
  - 10 暗灰褐色粘土 (地山少量、しまり若干強)
  - 11 黄褐色粘土 (暗灰褐色粘土少量で、北から南へと比率は低くなる)
  - 12 暗灰褐色粘土 (土器・粒少量、灰色強)
  - 13 暗灰褐色粘土 (炭・土器・灰白色粒・地山粒混)
  - 14 暗褐色粘土 (しまり弱)

- P17**
- 1 灰色粘土 (砂質強)
  - 2 灰色粘土 (砂質強)
  - 3 灰褐色粘土
  - 4 暗灰褐色粘土
  - 5 暗灰褐色粘土 (炭少量、立ち上がりと堀込付近で若干地山混)

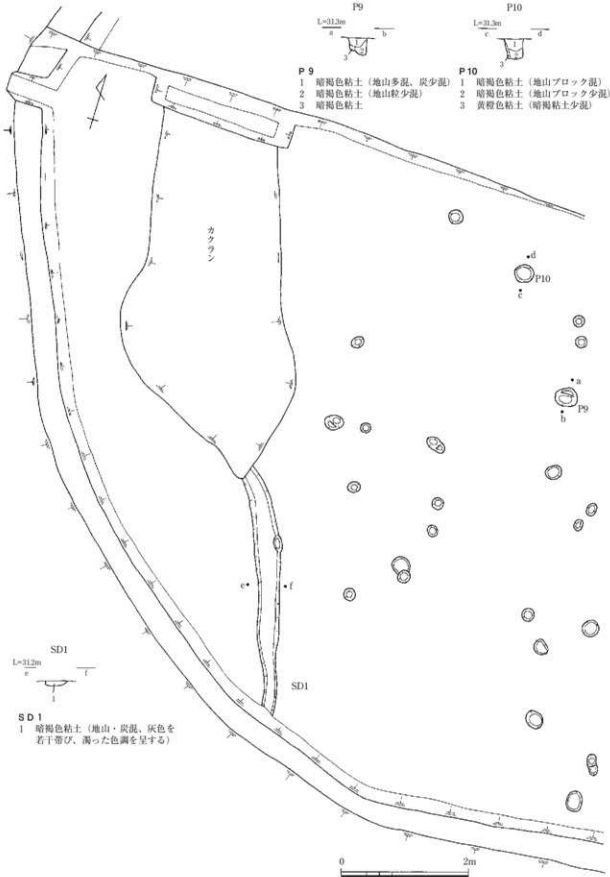
第34図 D区遺構実測図② (S=1/60)



第35図 D区遺構実測図③ (S=1/60)

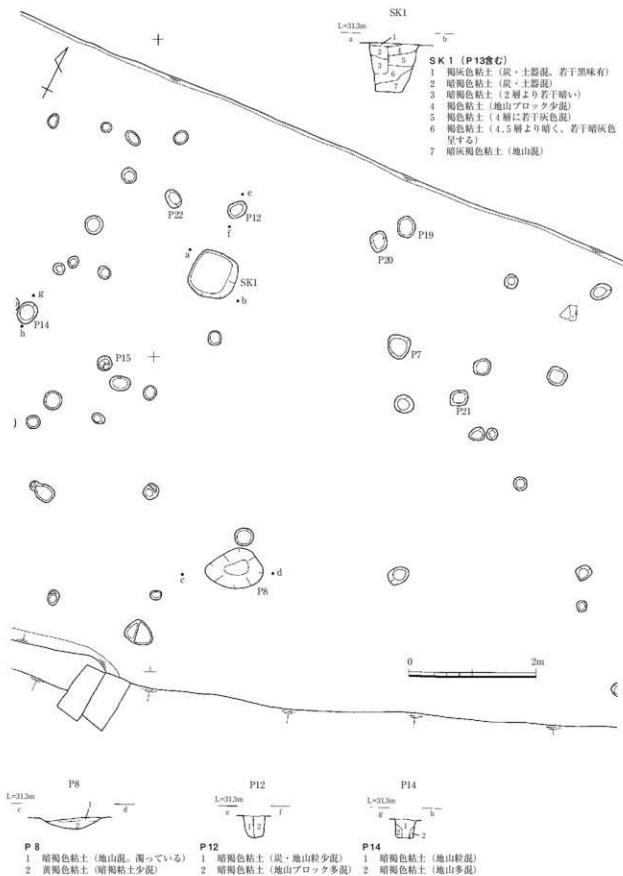
第6表 得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表②

18	C-76	5区S12内P4	罌	土師器	166	-	(5.5)	橙	にぶい-橙	粗砂多量	並	ハケメ	ナデ	海砂質・赤色 粘土を含む
19	C-71	5区S12内P4	罌 <td>土師器</td> <td>132</td> <td>-</td> <td>(9.5)</td> <td>にぶい-黄橙</td> <td>にぶい-黄橙</td> <td>粗砂・細砂多量</td> <td>良</td> <td>ナデ</td> <td>ハケメ</td> <td>海砂質・赤色 粘土を含む</td>	土師器	132	-	(9.5)	にぶい-黄橙	にぶい-黄橙	粗砂・細砂多量	良	ナデ	ハケメ	海砂質・赤色 粘土を含む
20	C-70	5区S12内P4	高杯	土師器	180	-	(4.2)	にぶい-橙	にぶい-橙	粗砂多量	並	磨丸	磨丸	海砂質・赤色 粘土を含む
23	C-72	7区S81最上土、 暗灰濁粘	体部	土師器	-	-	(9.1)	暗灰黄	橙	粗砂・細砂多量	並	ハケメナデ	ナデ	海砂質・赤色 粘土を含む
26	C-64	5区SD1上層(中 央7号墓)	罌	土師器	170	-	(6.6)	にぶい-黄橙 黄灰	にぶい-黄橙	細砂含	並	ヨコナデ ナデ 指印直 ケズリ	ナデ ハケ	海砂質を含む
27	C-65	5区SD1中央7号 土層	高杯	土師器	-	-	(5.8)	にぶい-黄橙	橙	細砂多量、粗砂 少量	並	指ナデ ナデ	ナデ	
28	C-81	5区S12暗灰濁粘	罌	土師器	138	5.8	7.2	黄灰	にぶい-黄橙 にぶい-橙	細砂少量	並	ヨコナデ	ナデ 指印直	海砂質・赤色 粘土を含む
29	D-47	5区SD1上層(中 央7号墓)	無台杯	磁器器	140	8.0	3.4	灰- 灰白	灰- 灰白	細砂少量	並	ヨコナデ	ナデ 指印直	海砂質・赤色 粘土を含む
30	D-46	5区SD1上層(中 央7号墓)	罌	土師器	-	7.4	(1.8)	赤- 赤濁	赤濁- 赤濁	粗砂多量	並	ナデ	ナデ ヨコナデ	海砂質・赤色 粘土を含む
33	C-80	E-5区清水溝	罌	土師器	116	-	3.2	黒泥	にぶい-橙	粗砂多量	良	ナデ	ナデ	
34	C-75	1区暗灰粘土層(護 国)	底部	土師器	-	7.4	(2.7)	暗灰	灰白	粗砂多量	並	ナデ	ハケメ	海砂質・赤色 粘土を含む
35	C-68	S12・S11・S10 見取	高杯	土師器	-	-	5.2	にぶい-橙	にぶい-黄橙	粗砂多量	良	ナデ	磨丸	海砂質・赤色 粘土を含む
36	C-73	E-5区清水溝	手づくね	土師器	3.8	3.0	3.2	にぶい-黄橙	にぶい-黄橙	粗砂少量	良	ナデ 指印直	ナデ 指印直	海砂質・赤色 粘土を含む
37	D-38	1区黄濁粘	罌	磁器器	-	-	(7.8)	灰	灰	細砂多量	良	ナデ	ナデ	
38	C-74	1区黄濁粘	罌	土師器	-	-	-	橙	橙	粗砂多量	良	ナデ	ナデ	海砂質・赤色 粘土を含む

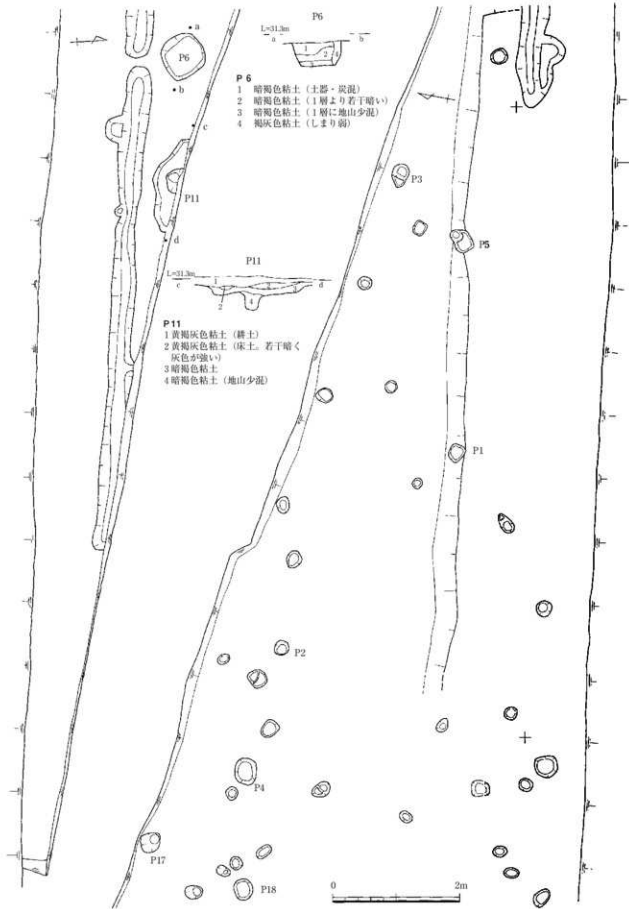


第36図 E区遺構実測図① (S=1/60)



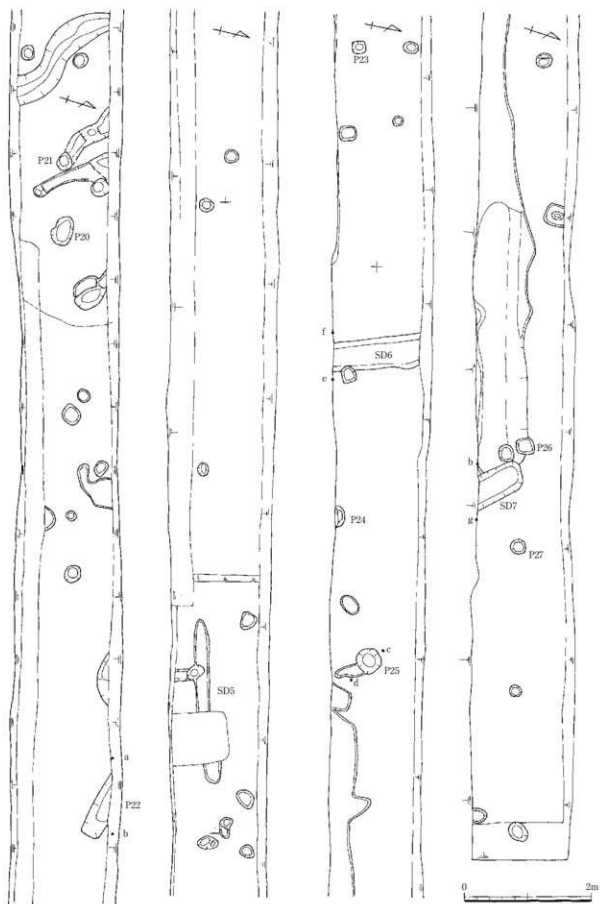


第37図 E区遺構実測図② (S=1/60)

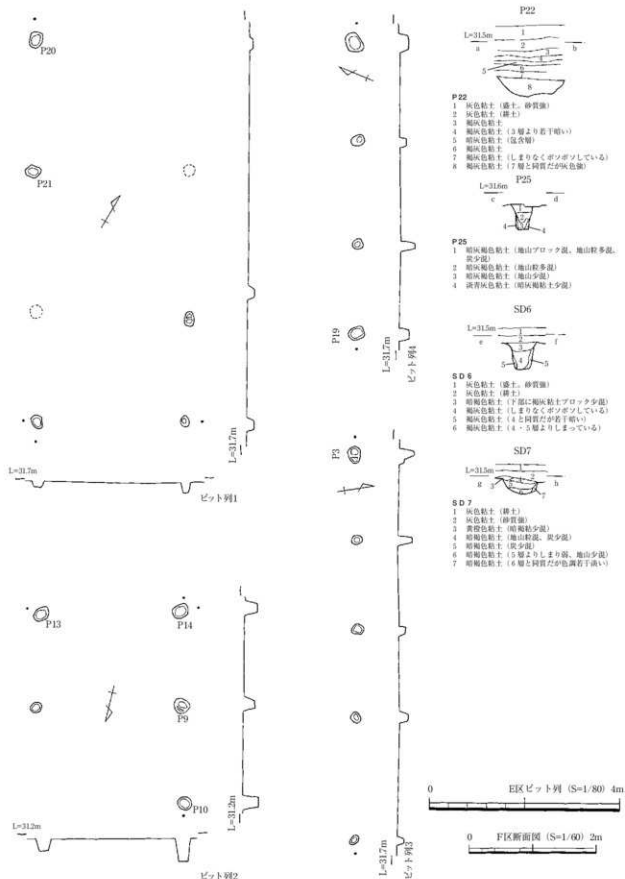


第38图 E区遺構実測図③ (S=1/60)





第40图 F区遺構実測图2 (S=1/60)



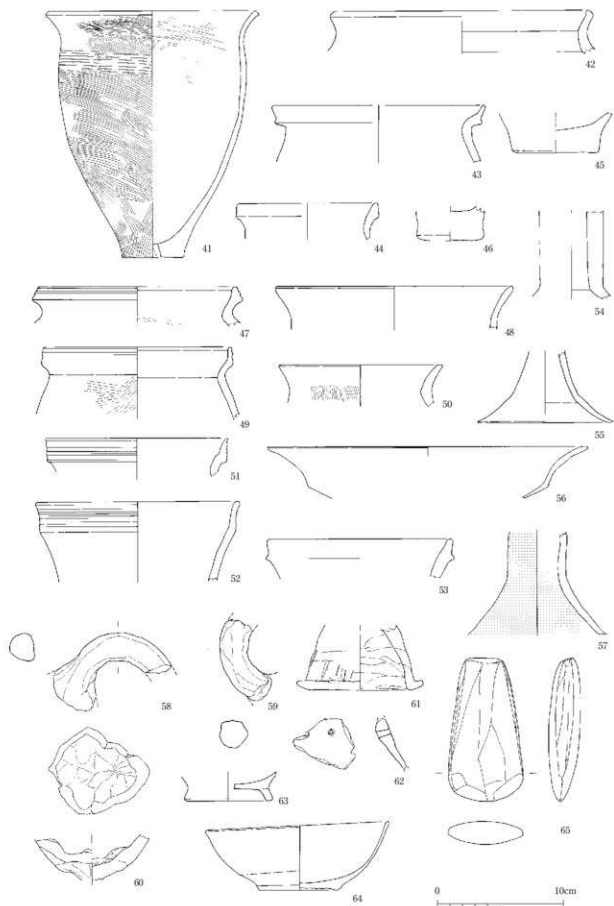
- P22**
- 1 灰色粘土 (粘土、砂質混)
  - 2 灰色粘土 (粘土)
  - 3 褐色粘土
  - 4 褐色粘土 (2層より若干細かい)
  - 5 褐色粘土 (混合層)
  - 6 褐色粘土
  - 7 褐色粘土 (しまりなくボソボソしている)
  - 8 褐色粘土 (7層と同質だが灰色混)

- P25**
- 1 褐色細砂土 (地山アロク少混、地山粒多混、炭少混)
  - 2 褐色細砂土 (地山粒多混)
  - 3 褐色細砂土 (地山少混)
  - 4 深褐色粘土 (褐色細砂土少混)

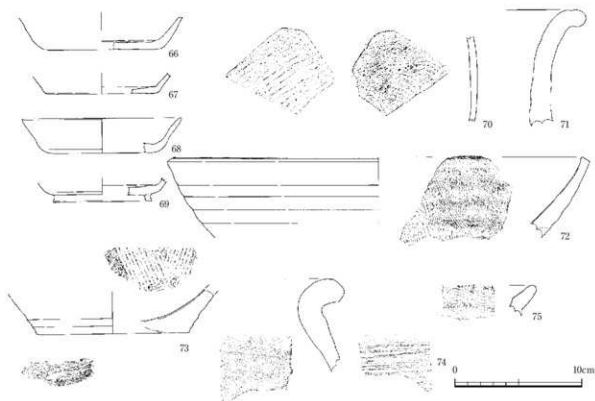
- SD8**
- 1 灰色粘土 (粘土、砂質混)
  - 2 灰色粘土 (粘土)
  - 3 褐色粘土 (下部に褐色粘土アロク少混)
  - 4 褐色粘土 (しまりなくボソボソしている)
  - 5 褐色粘土 (4・5層間が若干細かい)
  - 6 褐色粘土 (4・5層よりしまっている)

- SD7**
- 1 灰色粘土 (粘土)
  - 2 灰色粘土 (砂質混)
  - 3 黄褐色粘土 (褐色細砂土少混)
  - 4 褐色粘土 (地山粒混、炭少混)
  - 5 褐色粘土 (炭少混)
  - 6 褐色粘土 (5層よりしまり混、地山少混)
  - 7 褐色粘土 (6層と同質だが色混若干濃い)

第41図 E・F区遺構実測図 (S=1/60・80)



第42図 出土遺物実測図① (S=1/3)



第43図 出土遺物実測図② (S=1/3)

第7表 得田氏館跡平成15年度調査区 遺物観察表③

報告番号	実測番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	最大厚	備考
16	石-4	5区SD2上面	台石	29.7	19.7	12.0	11.4	安山岩
21	C-29	5区S12内P4	粘土塊	4.1	3.8	2.5	-	-
22	石-6	2区S11内P7	石鏝	24	1.5	0.3	1.2	安山岩
24	金-4	7区SK1上面	鉄滓	6.7	5.8	2.2	90.1	鍛冶滓
25	石-3・7	5区SD1内アゼ(灰粘)	剥片	2.1	2.05	1.15	4.9	鉄石英
31	金-5	5区SD1	鉄滓	8.0	6.6	2.9	155.0	鍛冶滓
32	石-8	5区SD1内(灰粘)	羽口P	24	3.4	1.8	16.9	溶解炉片の可能性
39	石-5	表探	砥石	6.0	4.7	1.5	50.3	泥岩
40	木-4	出土地不明	杭	29.3	5.3	3.2	-	-

第8表 得田氏館跡 平成16年度調査区 遺物観察表①

報告番号	実測番号	出土地点	器種	種類	口径	底径	器高	色調内面	色調外面	胎土	焼成	調整内面	調整外面	備考
41	D-10	F区S17アセ層	罌	弥生	16.4	4.9	19.6	浅黄橙	にぶい橙	粗砂含む	良	ヨコナデ、ナ デ、ハケ	ヨコナデ、ナ デ、ハケ	薄黄、海綿管含む 土層破面 系属不明一部 破面
42	D-5	F区S11中・下層 (アセ層)	罌	弥生	20.0	-	3.0	橙	橙	粗砂多く含む	良	磨耗	磨耗	海綿管含む 現存破面
43	D-2	ERP 6、2層	罌	弥生	(16.0)	-	(4.6)	橙	黒	粗砂多量、薄黄 少量含む	良	磨耗	磨耗	海綿管含む 現存破面 海綿管小片
44	D-3	ERPD	罌	弥生	(10.8)	-	(2.9)	橙	橙	粗砂多量含む	良	磨耗	磨耗	海綿管含む 現存破面 海綿管2-4層
45	D-33	F区S11L層	罌	弥生	-	(5.2)	(2.9)	黄灰	にぶい橙	薄少量、粗砂や や多く含む	良	磨耗	磨耗	海綿管含む 現存破面 現存破面
46	D-17	F区S D2	罌	弥生	-	6.8	3.3	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多量含む	良	磨耗	磨耗	海綿管含む 現存破面
47	D-25	F区西包合層	罌	弥生	(15.4)	-	(3.1)	黄灰	浅黄	粗砂・薄黄含む	良	ナデ、ハケメ	ナデ、海綿管 2巻	海綿管、赤色含む 現存破面
48	D-32	F区S11L層	罌	弥生	(18.4)	-	(3.4)	灰白	灰黄褐	粗砂含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ	現存破面
49	D-9	F区S11下層	罌	弥生	(14.7)	-	(5.8)	浅黄橙	にぶい陶	薄少量、粗砂多 く含む	良	磨耗	ナデ、ハケメ 海綿管2巻	海綿管含む 現存破面 海綿管小片
50	D-19	B区S11	罌	弥生	(12.8)	-	3.4	黄橙	浅黄橙	粗砂多量、薄黄 量含む	良	ヨコナデ、ナ デ	ヨコナデ、ハ ケ	海綿管含む 現存破面 海綿管2
51	D-4	F区S D2	罌	弥生	14.3	-	(2.7)	陶、にぶい赤 黄	赤橙	粗砂多く含む	差	ヨコナデ、ナ デ	4巻の海綿管 ヨコナデ	現存破面
52	D-6	F区S11下層	鉢	弥生	(16.0)	-	(6.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ	現存破面
53	D-12	F区S D2	罌	弥生	(14.4)	-	(3.1)	褐色	灰褐色	粗砂多量を含む	良	ヨコナデ、ナ デ	ヨコナデ	海綿管含む 現存破面
54	D-27	F区S D2	高杯	弥生	-	-	(7.1)	黄橙	淡橙	粗砂多量、薄黄 少量含む	良	磨耗	磨耗	赤色、海綿管含む 現存破面
55	D-1	ERPD 5	高杯	土師器	-	10.8	(5.8)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂少量含む	良	磨耗	磨耗	赤色、海綿管含む 現存破面
56	D-13	F区S D1	高杯	土師器	25.1	-	(5.1)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂少量含む	差	磨耗	磨耗	現存破面
57	D-31	F区東包合層	高杯	土師器	-	-	(8.2)	黄橙	橙	粗砂含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ	内面赤 現存破面
60	D-14	D区東包合層	底部	甌	-	-	(4.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細・粗砂多く含む	差	シボリメ	シボリメ	海綿管多く含む
61	D-11	F区P1	脚部	甌	-	8.1	(5.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多量を含む	良	ナデ	ナデ	海綿管含む 現存破面
62	D-7	F区S11アセ層	脚部	土師器	-	-	(4.0)	浅黄橙	にぶい橙	磨りつぶを含む	良	磨耗	磨耗	赤色、海綿管含む 小片
63	D-21	D区P12	有台碗	土師器	-	(7.0)	2.4	浅黄橙	橙	粗砂多量含む	良	磨耗	磨耗	現存破面
64	D-20	B区P6	有台碗	土師器	(14.3)	(6.2)	(5.3)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂含む	良	回転ナデ	回転ナデ、回 転ハケ	薄黄、海綿管 現存破面
66	D-30	D区東包合層	無台杯	灰土器	-	8.6	(2.0)	灰白	灰白	粗砂少量含む	差	ロクロナデ	ロクロナデ、 ナデ	現存破面
67	D-23	D区P10	無台杯	灰土器	-	(8.9)	(1.7)	青灰	青灰	薄少量、粗砂含 む	良	ロクロナデ	ロクロナデ、 回転ハケ	現存破面
68	D-22	D区P3	無台杯	灰土器	(12.5)	(7.6)	(2.8)	灰	灰	粗砂含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ	現存破面
69	D-24	D区西包合層	有台杯	灰土器	-	(7.8)	(1.9)	灰	灰	薄少量、粗砂含 む	良	ロクロナデ	ロクロナデ、 回転ハケ	現存破面
70	D-26	D区S11	罌	灰土器	-	-	-	青灰	灰オリーブ	粗砂・薄黄含む	良	タタキ、ナデ	タタキ	現存破面
71	D-29	D区東包合層	罌	灰土器	-	-	(9.2)	灰白	灰	粗砂含む	良	回転ナデ	回転ナデ	現存破面
72	D-38	溝	鉢	珠洲	32.4	-	(6.4)	灰	灰	粗砂含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ	現存破面
73	D-18	不明	罐	越前	-	(12.1)	3.4	赤	赤	粗砂多量、薄黄 量含む	良	ロクロナデ、 オロシメ	ロクロナデ、 回転ハケ	現存破面
74	D-28	D区西包合層(浅包)	罌	珠洲	(59.0)	-	(7.4)	灰	灰	粗砂多く含む	差	ロクロナデ	ロクロナデ	海綿管含む
75	D-15	D区西包合層	鉢	珠洲	-	-	(2.9)	青灰	緑青灰	粗砂少量、粗砂 含む	良	ロクロナデ、 流灰文	ロクロナデ	口縁部付

第9表 得田氏館跡 平成16年度調査区 遺物観察表②

報告番号	実測番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	備	考
石-1	石-1	重機すきとり	石斧	11.35	6.0	2.5	261		蛇紋岩製
58	D-8	F区S11中・下層(アセ西)	把手	9.4	6.25	2.25	-		浅黄橙 粗砂多く含む 針、赤色粒有り 里底有り
59	D-16	F区西包合層	把手	6.45	4.0	2.25	-		浅黄橙 粗砂多く含む 針、赤色粒有り 上部破面に里 底有り



## 第7章 ま と め

幅の狭い調査区が多く様相を捉えにくいところもあるが、今回の調査成果を基に土田盆地における遺跡の変遷や旧地形の状況に説明を加えることでまとめたい。

遺構は縄文時代、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期、古代、中世の大きく5時期に分けた。なお堅穴住居はS1、掘立柱建物GSB、土坑はSK、溝がSD、柱穴はPを示している。

縄文時代では、館開城跡のA区でSK1を検出した。弥生時代後期～古墳時代前期では、得田氏館跡平成15年度調査（以下、H15）で1・2区境のS11と6区のSK3を検出した。得田氏館跡平成16年度調査（以下、H16）ではB区でS11とSK1・2を、E区ではSK1とP5・6・13を、F区でS11とSD1・3・6を検出した。古墳時代中期では、館開城跡B区でSD2を検出した。得田氏館跡H15では5区S12と4・5区境のSD2、H16でD区のS11を検出した。古代では、得田氏館跡H15の7区でSK1を、4・5区境でSD1を検出した。得田氏館跡H16のD区ではP3・6・10・12を検出した。中世では、館開テラアト遺跡A区でP1、B区でSB1・2、SK1・2、SD3、P3・4・6・8・9・11～19、C区ではSK1・2、P1を検出した。

遺跡周辺の調査区外箇所状況であるが、仏木新林遺跡の立地する丘陵では町道整備に係る切土工事が行われており、そこで深い土坑状の断面を検出し近辺でも土器片を確認し、弥生後期～古墳前期の円筒土坑と判断した。また館開城跡と得田氏館跡間の低地で古代の土器と柱穴を確認している。

以上の成果から以下の結果を想定できる。遺構の検出状況や遺物の出土状況、及び遺跡の立地状況から判断して、縄文～古墳時代は主に丘陵地の高台もしくはその裾部に集中して遺跡が分布しており、古代頃から丘陵裾部～低地にかけて遺跡が広がっていったものとする。低地を含むほぼ全ての調査区で中世の遺物が出土しており、特に中世から低地の開発が進んでいったものと判断できる。

館開城跡と得田氏館跡について若干補足する。館開城跡の立地する丘陵上は地元では城山と呼ばれている。その裾部で縄文・古墳時代の遺構を確認できたことは、城山で中世を含む複数時期にわたる遺跡が展開していた可能性を示唆する。得田氏館跡では中世の土田領主とされる得田氏に直接結びつくような遺構・遺物を確認できなかったが、今回の調査によって、得田氏館跡における中世の居住城が現徳田集落と重なる位置に存在していた可能性が高まったものとする。

次は旧地形の状況である。館開テラアト遺跡東端のA区周辺は沼地形を呈し、仏木新林遺跡の調査区南方向では地山標高の増加傾向が認められた。館開テラアト遺跡や仏木新林遺跡においては旧仏木川の流路を検出しており、また工事中の館開城跡周辺の地形を観察すると、地盤が緩い、おそらく鞍部と思われる箇所が広く点在する状況が見受けられた。つまり館開～徳田間に位置する低地は地山に比高差が認められ、開発前の地形は高低差のある地形だった可能性が高い。したがって館開～徳田間の低地は往時、旧仏木川の流路や鞍部によって鳥状の微高地が形成されており、その微高地ごとに遺構のまとまりがあったものと想定できる。遺跡の展開もそれに対応しているものとする。



遺跡遠景（東から）



A区完掘状況（南西から）



A区完掘状況（北西から）



A区P1（南から）



B区完掘状況（北西から）



B区P13土層断面（北東から）



B区SX4完掘状況（北から）



B区排水機場連結部分完掘状況（北東から）



B区SD3完掘状況（北から）



B区SK2完掘状況（北東から）



B区完掘状況（南東から）



B区排水機場完掘状況（北から）



B区SB2完掘状況(北から)



B区SD3遺物出土状況(南東から)



C区完掘状況（北西から）



C区完掘状況（南東から）



C区中央柱穴群（南東から）



C区SK1炭層検出状況（南西から）



C区P1土層断面(西から)



C区P3土層断面(南西から)



C区SK1炭層検出状況(南東から)



C区SK2土層断面(南西から)



C区SK2石検出状況(北東から)



C区SK2完掘状況(北東から)

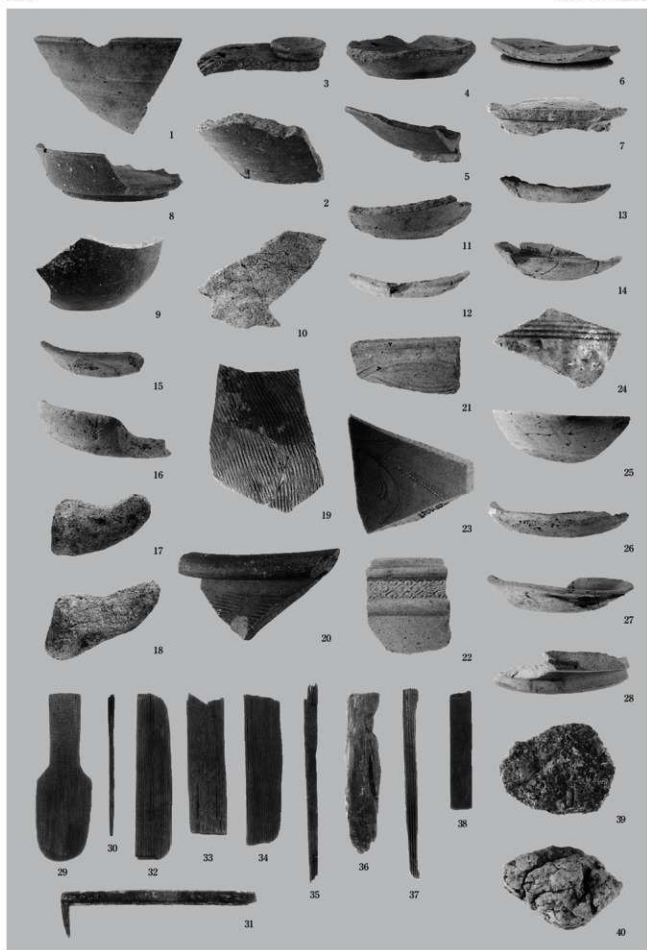


C区SD1完掘状況(東から)



館間集落内の板碑







B区遺構検出作業（東から）



B区遺構検出状況（北東から）



B区SD2遺物出土状況(東から)



B区SD2完掘状況(西から)



A区完掘状況(南から)



A区SK1(北西から)



A区SK1土層断面(北西から)



A区SK1遺物出土状況(西から)



B区SD2遺物出土状況(南東から)



B区調査区壁土層断面(北から)



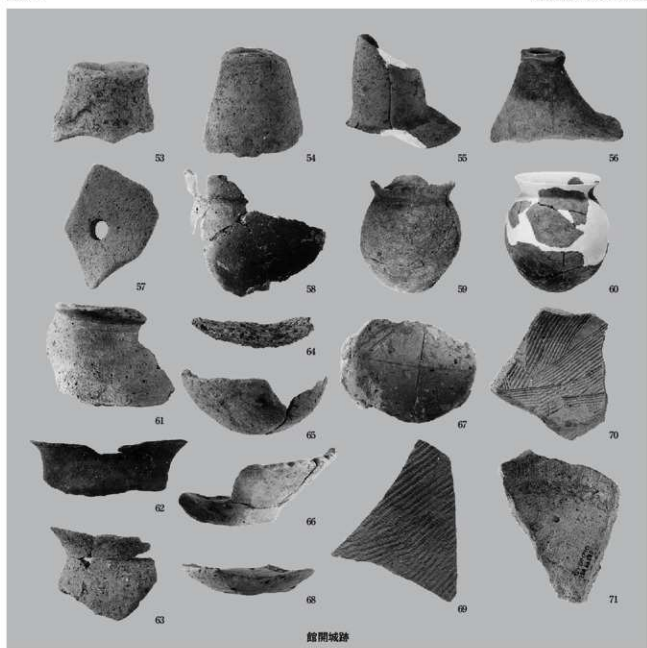
B区SD2土層断面(西から)



B区SD2土層断面(南から)









遺構検出作業（東から）



調査区完掘状況（北西から）



SK1土層断面（南東から）



SK1完掘状況（南西から）



調査区壁土層断面（南西から）





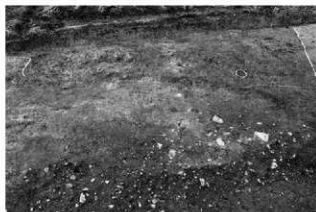
調査区発掘状況 (西から)



S11 (北から)



S11 検出状況 (西から)



S12 検出状況 (南から)



S12内P4 (東から)



S12土層断面 (南から)



S11・2 遺物出土状況 (東から)



SD1・2検出状況 (南から)



SD1遺物出土状況 (北から)



SD2アゼ遺物出土状況 (東から)



SD2遺物出土状況 (北から)



SD2遺物出土状況 (北から)



SD1・2土層断面 (南から)



SD1・2完掘状況 (南から)



SK1遺物出土状況 (北から)



SK 2 検出状況 (南から)



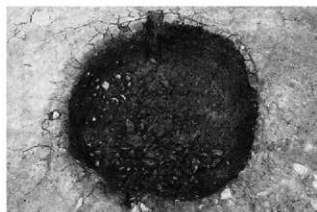
SK 2 礫出土状況 (南から)



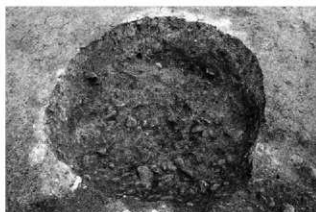
SK 2 礫出土状況下面 (南から)



SK 2 礫出土状況最下面 (南から)



SK 2 礫除去後 (南から)



SK 2 完掘状況 (南から)



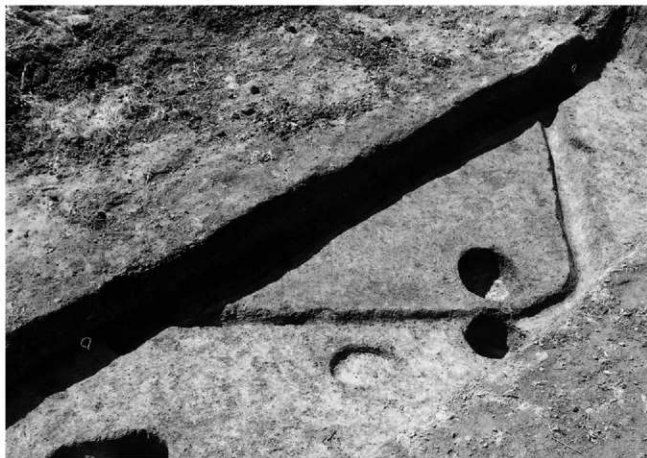
SK 3 (東から)



SD 3 完掘状況 (南東から)



B区遺構掘削作業（南東から）



B区S1完掘状況（南東から）



A区発掘状況 (東から)



B区発掘状況 (南から)



B区SK1 (東から)



B区SK2 (東から)



C区発掘状況 (西から)



C区発掘状況 (西から)



D区発掘状況 (北から)



D区P6遺物出土状況 (西から)



D区S11 (南東から)



D区完掘状況 (南から)



E区完掘状況 (北西から)



E区SK1 (西から)



F区完掘状況 (西から)



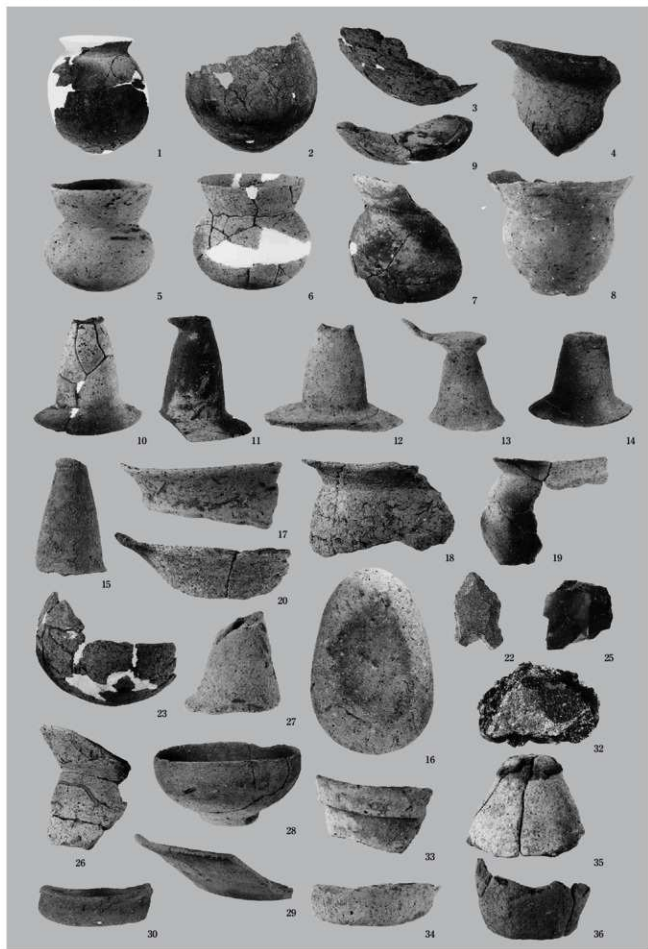
F区S11遺物出土状況 (南から)



F区SD3 (南東から)



F区SD6 (北から)







## 報告書抄録

ふりがな	しまち たちひらきいせきぐん							
書名	志賀町 館開遺跡群							
副書名	県営ほ場整備（土田地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷内明央							
編集機関	財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館開 テラート 遺跡	石川県 羽咋郡志賀町 館開地内	173843	29184	37 度 2 分 57 秒	136 度 49 分 22 秒	20030509 ～20030718 20031104 ～20031219	915㎡	県営ほ場 整備 (土田地区)
館開 城跡	石川県 羽咋郡志賀町 館開地内	173843	29185	37 度 3 分 2 秒	136 度 49 分 40 秒	20031104 ～20031219	50㎡	県営ほ場 整備 (土田地区)
仏木新林 遺跡	石川県 羽咋郡志賀町 館開地内	173843	29183	37 度 3 分 6 秒	136 度 49 分 28 秒	20030509 ～20030718	80㎡	県営ほ場 整備 (土田地区)
得田氏 館跡	石川県 羽咋郡志賀町 徳田地内	173843	29189	37 度 3 分 7 秒	136 度 49 分 53 秒	20030509 ～20030718 20040427 ～0610	1055㎡	県営ほ場 整備 (土田地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館開 テラート 遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物、土坑、 溝、ピット	土師器、珠洲焼、 青磁、木器				
館開城跡	集落跡	縄文時代 古墳時代	土坑、溝	土師器、石器				
仏木新林 遺跡	集落跡	古代・中世	土坑	土師器、須恵器、 珠洲焼				
得田氏 館跡	集落跡	弥生時代 ～古代	竪穴住居、土坑、 溝	弥生土器、土師器、 須恵器、石器				
要約	館開テラート遺跡で13～14世紀代の集落跡、館開城跡で縄文時代の土坑と古墳時代中期の溝、仏木新林遺跡で時期不詳の貯蔵穴、得田氏館跡で弥生時代後期～古墳時代中期と10～11世紀代の集落跡を検出した。							

## 志賀町 館開遺跡群

発行日 平成18（2006）3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 カンダ印刷株式会社